俳　句　雑　誌

水　明

2020　10月号

令和二年十月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十三巻第十号

《今月のかな女》

秋雨や殊に杉戸の繪をぬらす

（句集『龍膽』）

長谷川かな女

杉戸は、書院造の広縁など、直接外気に接する場所の間仕切建具に、絵を描くために考え出されたもので、杉の鏡板に花鳥画などが描かれた。華やかさのある春雨とはちがって、もの寂しさをおぼえる秋霖が、優美な杉戸の繪を容赦なく濡らしてゆく。明治の終り頃の時代性を、遺憾なく表した俳句である。

（鬼之介・註）

水　明

第1081号

―華の一句―

耳打ちの膝を進めて京扇子

梅澤佐江

着物の裾を巧みに捌いて膝を進め、形も大きさも、そして、香も品の佳い京扇子を半開きにして左の頬に当て、男の耳元に口を寄せる女。ぞくっとするあでやかな姿態である。大方の男は一ころだろう。

こんな女に、一度出会ってみたい。

（鬼之介・推薦）

水明

令和２年

１０　月号

今月のかな女　1
華の一句　山本鬼之介　4
平家琵琶（作品）　境　延昭　6
有らぬもの（近詠）　島津　初花　7
名水瓜割公園（近詠）　町野　広子　8
雪景　※雪欄作家近詠鑑賞　井口　俊晴　10
硯箱　※季音月評
季音「雪」（同人作品）　菊池ひろこ　五明　昇　境　延昭　ほか　12
季音「月」（同人作品）　大場　順子　小倉　倭子　高島　寛治　ほか　18
季音「花」（同人作品）　正木　萬蝶　梅澤　佐江　福田　千春　ほか　24
鼓笛集（同人作品）・私の一句　66
新同人紹介　30

現代俳句鑑賞　網野　月を　28
俳誌望見　梅澤　佐江　37
句集喝采　近藤　徹平　69
夏季競詠　大橋　廸代　矢作　水尾　青木　鶴城　ほか　38
夏季競詠作品評　山本鬼之介　58
水　琴　窟（水明集七月号鑑賞）　池田　雅夫　64
水明例会報・各地句会報　70・74
新珠賞作品募集　83
水明全国大会・水明塾のお知らせ　81・82
「水明発展基金」からのご挨拶　27
水明発展基金御礼　85
風声・後記　84・86

題字：長谷川かな女　表紙：内田恵子　カット：福田千春

平家琵琶

山本鬼之介

落ちさうで落ちぬ離宮の桐一葉

逢へるなら佞武多近づく橋の上

戒名を付けてやりたき秋の蟬

平曲や雲に隠るる居待月

彼の歌の一本杉のある花野

抜手切るやうに芒の原を行く

この辺り元・紺屋町はしり蕎麦

四阿にその名雅よつづれさせ

有らぬもの

境　延昭

口絵には半裸の女きらら虫

有らぬもの有らぬところに虫払ひ

書を曝すイニシアルにあるロシア文字

新涼の棚のコニャック壜は空

捨てきれぬ名画のパンフ秋の虹

箱入りの「寒村自伝」秋の蠅

読めぬ字の豪華図録や秋ともし

極度の視力低下で活字を読むのが苦痛の筈が本の類は増え続ける。我が家最大の家具である書棚は満杯、机もテーブルも本の置場で書斎の用を為さない。居間のライティングデスクも満杯となり、今や食卓の半分近くが占領状態にある。コロナで蟄居のこの時と始末に取り掛かった。中を見たら駄目、考えたら駄目で何とも難事業で力仕事である。

頼みの古書店は疾うに廃業。新書文庫版はブックオフへ、全集の類は図書館に寄贈した。しかし難敵のハードカバーそして食卓の占領状態は依然手付かずである。

名水瓜割公園

島津初花

谷川を囃すおはぐろ蜻蛉かな

八十八仏御堂へ響く蟬しぐれ

滝音は弾き終止符のなき楽譜

夏空へ筒抜けなりし鯉の口

くず餅を沈めし水の透明度

夏草をひきし語りつ句碑清掃

美しき碑文字を伝ふ滝の水

瓜が割れる程冷たい「瓜割の滝」は、全国名水百選の水の公園である。

天徳元年、白山信仰を開いた泰澄大師が馬頭観音像を刻み安置したところで天徳寺と名付けられた。山の中腹に大師堂があり、周りの八十八体の温和な顔つきの石仏は訪れた人々の思いを受け止めてくれる。

今年の瓜割公園内の句碑清掃は、八月に入り連日猛暑の中、乙花会が行った。コロナ感染に気を付けて、充実した時間を共有した。

雪景

◎季音雪欄作家近詠鑑賞

町野広子

◇時の疫（六月号）

茂木　和子

ぐづり泣く赤子に木瓜の花あかり
天蓋に似て幽かなり藤の風

赤子は泣くのが仕事と相場は決まっているのだが、そう言えば、近頃泣いている赤子をあまり見掛けない。親の目が良く行き届き、取り巻く環境が良くなったのであろう。暑い寒いで眠れぬ事もなく、オムツも紙でサラッとして気分が良い。掲句の赤子は眠いのに眠れない。庭へ抱いて出ると木瓜の花が優しい。二句目古木の藤棚からは、長い房となり花が垂れる。棚の下は大きな日除けとなり、あたかも天蓋の様で辺りには幽かな風が芳香を運ぶ。幸せを感じる一時。

春雷や人の手少し借りて生く
夏館エアープランツ咲く窓辺
時の疫の「三密」ごもり夏ごもり

人は一人では生きて行けず、気付かぬ内に誰かに助けられている。春雷のその日改めて思い知る。常に花々を好む作者ほぼ水が要らないエアープランツを咲かせたらしく「好きこそ上手」のお手本。植物の乾いた感じが夏館に相応しい。時の疫つまりコロナウイルス「三密」でそれと判る上、ごもりの繰返しに、長期の自粛への戸惑い、恐怖そしてうんざり等々が感じ取れる。歴史に残る災厄に見舞われている今。

◇庭の花づくしⅡ（六月号）

永野　史代

黄に徹しをり芽キャベツの花ざかり
木香薔薇反乱のごと傾れをり

小さな小さな葉球を食す芽キャベツ。その花はあくまでも黄色で庭の一角が幸せの色に包まれる。二句目木香薔薇の花は小さく、華やかな黄花と芳香の強い白花がある。生命力が強く枝葉がよく伸びる。中七下五は言い得て妙。因みに作者宅は筆者宅と同じく白花らしい。

空へちりばむ勿忘草のブルーの恋よ
源平菊の末裔はいろやさしかり
ラベンダーの花の袋を枕辺に

導入が美しく広がり、空と花のブルーに心が奪われる。「私を忘れないで」筆者には悲しい思い出の花。昔、父子家庭の六年男児の葬儀の帰り手渡されたのは勿忘草の種。中学生の姉と父親の姿に涙した。源平小菊は、姫女菀を小振にしたような白花で、風に揺れる可憐な姿に癒される。花の終りには淡いピンク色となり、源平の所似は色の変化から来た物と推察する。三句目ラベンダーの花は、油をとり香料や薬用として使用される。又、この花は咲いている時にも触れると花も葉も芳香を放つ。作者は摘んだ花を布袋に入れ、香りを楽しみつつ眠りに着く。ご夫婦丹精の花の庭である。

◇受難曲（七月号）　大村　節代

胸中にバッハのソナタ新樹光
新樹光心に響く受難曲

ご主人様との会話や日常の思い出の数数。ある時ご主人が葬送曲を「バッハ」と呟いていた。突然のお別れの折に、幾年も前のその呟きを思い出し、バッハの曲の中でご主人様を見送られた。作者の中にはご主人様と共にバッハも生きている。ふとした時に聞こえて来るソナタや受難曲が、心に深く響き故人を想う。季語に透明感があり相応しい。

怒り肩と撫で肩添うて新樹かげ
大股の死者が出ていく新樹の夜
夜の新樹久にひもとく継色紙

公園に休んでいる二人の姿なのか否、筆者にはご主人と作者の事に思える。肩巾広く頼り甲斐のあった夫と撫で肩の作者。良い距離感のお二人であったに違いない。二句目「大股の死者が」とリアルな表現で、去り逝く人の潔さや見送る人の感謝の念、又新樹の夜の静寂、澄んだ空気感、青々とした夜の匂い、何より作者の深い目差が見えてくる。三句目は「夜の新樹」前句の「新樹の夜」とは趣が異なって来る。巷を騒がせているコロナウイルスの自粛生活で、たっぷり出来た自分の時間。この夜久々に継色紙を取り出してみた。万葉集や古今集等の歌を書き写したそれは、染められた和紙を用いた大変貴重な物。作者は心に栄養を与える。

◇藤房（七月号）　菊池ひろこ

藤房を斬れば翅音の藤色に
藤房の斬られあだ波たつ水面

作者の言葉にもあるように、今世界中を巻き込んでいるウイルスに花々までも巻き込まれてしまった。盛りを迎えた藤房が斬られた。人の密を避ける為の策ではあるが、二句共に花の無念が伝わる。来年の花は今日のこの花に否ず。人に愛でられてこその花々を斬っているのは、丹精込めて育て咲かせた人々なのであり「斬る」が身につまされる。ある所ではチューリップも早々に頭を落とされていた。

蝌蚪らみな雄のつもりで動きをり
何某の旧式カメラ蝌蚪の池
郭公の杉深井戸に倒立す

両生類や爬虫類は見た目だけでは雌雄の区別が付かない。蝌蚪があまりにも活発に動くのを見て、作者は雄のつもりでいるのだと思った。頭でっかちの姿と、それを眺めている作者が見えて来る。元々は何方の物であったのか、旧式のカメラを手にシャッターを切る。旧式と言うにはフィルム式の物であろうか「何某の」で、この古いカメラに愛着を持ち大切にしている様子が判る。三句目、郭公がいつも止まるお気に入りの杉の大木が側の深井戸に写る。逆さ富士ではないが、杉の木はその高さのまま逆さに写る。湖に写る富士や川に写るスカイツリーではなく、深井戸なので、それを倒立と見た作者のユーモアが楽しい。

硯箱

◆季音七月

井口俊晴

春昼や発条ゆるぶ鳩時計　　五明　昇

のんびりした眠たくなるような春の午後。ソファーに座って本を広げているが、書いてある事が頭に入らず、同じ箇所を行ったり来たりしている。と、柱の鳩時計がポッポーと時刻を知らせた。最近はクオーツ式の鳩時計が増えているようだが、我が家は昔ながらの手巻き式の本格派。しかし、家の主だけでなく、時計までゼンマイが緩くなってしまったようだ。その時、キッチンから「コーヒーでも入れましょうか」と言う妻の声が聞こえた。

歩き初むる稚の背を押す新樹風　　茂木　和子

みずみずしい若葉の季節。幼稚園や小学校に通い始めた新一年生が、やっと新生活に慣れた頃である。冬の間、家の中で伝い歩きをしていた幼児が、お母さんにちっちゃな靴を履かせてもらい、よちよち歩き始める頃でもある。前のめりになって歩く、危なっかしい背中を、若葉に吹く風がそっと押す。おっと、転びそうになったけれど、なんとか踏みとどまり、また歩き出した。

過ぎし日を上手に畳み更衣　　矢作　水尾

今年も衣更えの季節になった。寒い日々に着ていた着物を、涼しいものと入れ替える。ただ、それだけのことなのに、季節の移ろいをしみじみと感じる。先日あった大学卒業五十周年の式典に着て出かけた藍大島。半世紀ぶりに再会したクラスメートから褒められた着物だ。それから、これは娘の卒業式にも着たウールの紺のスーツ。着物も洋服も飽きずに何年も大切に着て、思い出がいっぱい詰まっている。それら一枚一枚を丁寧に、きれいに畳み、また袖を通す日までそっとしまう。「上手に畳み」が光っている。

疾駆する葦毛栗毛や新樹光　　丸山マスミ

五月と馬は相性がいい。ダービー（中央競馬）の開催は毎

年五月と決まっている。競走馬でなくとも、澄み切った空の下、太陽の光を浴び、緑の牧場を思い切り走り回ったら、さぞ気持ちがいいだろう。葦毛や栗毛、様々な毛色の馬が一斉に走り出す。ところで、葦毛とは「白い毛に黒色・濃褐色などの差し毛のあるもの」（広辞苑）なのだそうだ。平家物語を読んだら、「連銭葦毛なる馬に金覆輪の鞍置いて」などと出てくる。格好がいい馬なのである。

滑空のあごのしろがねびかりかな　　森川　義子

あご（飛び魚）は元気のよい魚である。テレビで見たことがあるが、水上に飛び出し、胸びれを広げて百メートルくらい、グライダーのように滑空する。スピードは時速五十キロ以上にも達するらしい。そんな雄姿を船の上から見て「しろがねびかり」と讃嘆した作者の気持ちがよく伝わってくる。さて「あご」の名だが、飛び魚は「顎が落ちるほど美味しい」からだとか。あごの出汁もなかなかですよ。

初夏の陽にビタミンDの充電中　　福田　千春

子供の頃は「日光をたっぷり浴びて骨を丈夫にしなさい」と言われたものだ。なぜなら、日光がビタミンDに働いて、カルシウムの蓄積に役立つと信じられていたからだ。ところが、最近は日焼けが皮膚がんの原因になると言われ、小さな子供でも日焼け止めクリームを塗ったりしている。でも、私はそんなことはしない。初夏の太陽をたっぷり浴び、ビタミンDを充電することにしよう。

雑草じゃないと言い張る犬ふぐり　　秋山　冷子

春の道端で見かける犬ふぐり。薄紫の小さな花をつける野草だ。なんでそんな名前が付いてしまったのか、不思議がる人が多いのでは。それほど可憐な草で、作者のようなファンも多い。なんでも、その実の形が犬の陰嚢（ふぐり）に似ているのが不幸の原因とか。その犬ふぐりが「私は雑草じゃあないよ」と言い張っている。人は時にひどい名前を付けるものだ。私は「蛇苺」なんかも気の毒だなあと思っている。

蝌蚪住まふ手水鉢ある無住寺　　石田　慶子

村の外れの小さなお寺。檀家が減って、ふだんは住職も住んでいない。めったに訪れる人もいないので、なんとなく暗くて寂しい。ふと見ると、庭の隅に置かれた手水鉢の中で動くものが。孵ったばかりのオタマジャクシだ。苔むした石の手水鉢を住処として、ちょろちょろ泳ぎ回っている。「蝌蚪住まふ」という措辞に、ほっとした温かさを感じる。

季音雪

夏の海　菊池ひろこ

太陽を白と思へり海開き
アトリエを高所に置きて夏の海
幼児の足裏に温(ぬる)し夏の海
漕ぎ出さば花睡蓮の暗き水
青梅雨や風見鶏そもシルエット

落日　五明昇

打水や下駄音かろき五条坂
ふるさとが香る夜店の杏飴
焼岳に火を放ちたる大西日
落日に縋る出船や佐渡晩夏
夏深し爺の繕ふ四つ目垣

千年杉　境延昭

天地や千年杉の岩清水
グッピーの心療内科待合室
敷藁の匂ふ厩舎や梅雨湿り
ががんぼや脚註にある斜体文字
またひとつ秘密を殖やし蛇苺

家籠り　椎野美代子

天花粉土まだ知らぬ土踏まず
枇杷すする匂ひの中の誕生日
生麦酒シルクの泡の口に触る
羅やほどろほどろと酌み合うて
香水のゲラン・エルメス家籠り

合歓の花　島津初花

合歓咲いて日暮れ明るし寺の鐘
紫陽花の白に咲けども色を変へ
喉元を弾くラムネの小休止
新ジャガを掘り広げたる通し土間
雲の峰水道工夫は背を丸め

青嶺　鈴木康世

常に見る富士の在り処や夏燕
山百合や雲脱ぐ富士を指呼の間に
南アルプス背景にして青嶺濃し
青嶺の風比翼の鳥を飛びたたす
青嶺暮色金星きらと輝やけり

瀬戸の海　田寺玲子

梅雨茸や沖の黒雲ただならず
横文字の光る表札山ぼふし
朝まだき荒涛を裂きヨットゆく
まだ暮れぬ瀬戸の島々土用波
夏霧の流るる港灯のあはき

巴里祭　永野史代

青み帯びたる青年の幹蝸牛
やはらかく握る手はなす明易し
スカイツリーに重ねしおもひパリー祭
マリーアントワネットの青春何処巴里祭
洒落・華奢・粋な娘と夫と巴里祭

風鈴　波多野寿子

風鈴やガラス器ひびく奥座敷
まだ弾ける指に力を葉月の夜
心奥にのこる玉音敗戦日
美しすぎる虫の鳴く音に眠られず
送り火や空の遠くに星ひとつ

縁の糸　星野和葉

遠雷や鉤針編みの一目落つ
夏料理ガラス細工の耳輪揺る
山水の細身の掛軸夏料理
血まなこになりても無駄に百日紅
血筋より縁の糸や百日紅

門庭　茂木和子

水甕の萍逃ぐる所なし
浮草や孵化のはじまる小宇宙
萍に烏羽色の脱皮あと
河骨の首の無防備夜の風
門庭に雨の匂ひの燕子花

明易し　矢作水尾

纜を解くや港は明易し
漁火の移りて岬明易し
手のひらに山の匂ひや清水くむ
雷の虚空一喝して去りぬ
遠き帆の白あざやかに夏の朝

襟白粉　山中順子

風のみちあれば水筋苔清水
笹竹の撓りを返す山清水
山仕事だけが占めたる岩清水
葛餅や肘上げて挿す花かんざし
御車代挟む夏帯襟白粉

夏終る　山中みどり

梅雨上る潮の香りの清洲橋
梅雨上る泡のワインを開けようか
青シャツに貝の釦や夏来たる
瑠璃色の硝子のチロリ夜の秋
着流しの藍の匂ひや夏の果

梅雨滂沱　由良ゆら女

転寝に肩をこらして半夏雨
疫の街ふぐ提灯のさみだるる
大河にさらはれさうな葭すだれ
梅雨滂沱街に残りし傘の骨
風死すやまつたりと啼く夕鴉

秋旱　吉住光弥

朝顔やあさを濡らせり一途の紺
冷麦に遊び心や彩の麺
底紅や情に葛藤果つる迄
踊の血制御効かざる手が脚が
秋旱体内に血のこげくさし

悪くない　網野月を

見渡すかぎり鳥獣保護区閑古鳥
悪くないＡＩ俳句さくらの実
梅雨明けやはつきりしないスケジュール
昼ビール左手を振る招き猫
夏の海ずーつと向こうに冬の海

微睡　石井喜恵

短夜のかちかちと振る修正ペン
丁寧にページ繰る指明易し
醗酵の微かなる音明易し
見つめたり見つめられたり夜の金魚
まどろみの夢の中なる遠郭公

飴細工　石山かつ子

山奥の杣だけの知る岩清水
出番待つ舞台の袖や夏さらへ
病棟の夜間出口や火取虫
宙を見て老の独白夕端居
夜店で買ふ象や騏驎や飴細工

郭公　大橋廸代

弾む断つ捲るこそぐる梅雨の雷
この豪雨いづくで耐へむかつこ鳥
空海の朝餉はパスタ閑古鳥
郭公にせかされ結ぶ靴の紐
かつこ鳴く化粧地蔵に赤マスク

面相筆　大村節代

湯上がりの女(をみな)ゆるゆる天花粉
天花粉赤子の尻に蒙古斑
食ひ初めの匙は銀製メロン食ぶ
メロン食ぶ国語教師の天眼鏡
面相筆で描く目元や夜の秋

楸の葉　栢尾さく子

蚊遣香水禍を逃がれきたる宿
明日と云ふ言葉の余韻蚊遣香
三伏を垂れて静かや楸(ひさぎ)の葉
三伏の夢にまだ見る焦土かな
見事なる百合の収束疾風雲

季音月

夏山　大場順子

鳶の輪の吹き戻さるる青嵐
夏山や一刀彫の立ち姿
四つに組む闘牛の角夏嶺燃ゆ
雨蛙浮葉の艶にまぎれけり
紫陽花や瑠璃の雨降る七曲り

お平に　小倉倭子

葛餅や天神様の亀の首
盆踊互ひに老いて行き違ふ
踊り果て踊り疲れの下駄の音
紫黄忌の常温酒よお平に
反物の端切れのマスク秋はじめ

短夜　高島寛治

短夜のにはとり声を立てたがる
明易し推理小説下巻へと
夏木立疲れきつたる馬が立つ
トテ馬車の馬のでかさよ夏木立
冷奴まづは亭主の水自慢

妖花　柚木治子

霊気吐く奥の院への夏木立
始祖鳥の羽撃きに似て夏木立
建て替へし庭に曾ての青蛙
人面に見ゆる妖花や梅雨深し
時を告ぐ一瞬胸張る羽抜鶏

夏深し　井関礼子

任帯びしフェリー突切る雲の峰
願はくば翻したき更衣
常例の四万十鰻届きけり
老鶯の終の啼音を惜しみなく
初茄子や紫紺の艶を賞でもして

祭　笛　　藤澤喜久

下戸上戸幼馴染の祭笛
遠き日の母の笄土用干し
蚊帳の中秘密洩らしてしまひけり
花ユッカ潮傷みして片瀬橋
夏山の天辺に来て星拾ふ

夏の山　　森田祥絵

ずぶ濡れの墓域にたむろ梅雨鴉
紫陽花や牛久観音濡れて立つ
百合一輪机上にオンライン授業かな
夕蛙おまえもソーシャルディスタンス
遠い木は友の残像夏の山

永源寺　　鳥羽和風

孑孑の跳ねて書体の如しかな
木洩れ日が棒のごとくに苔の花
恐ろしき鳥の会話よ桜の実
大いなる山の影来て日除取る
梵鐘の一打に落つる蜥蜴かな

舫ひ舟　　丸山マスミ

水面との国盗り合戦根無草
野良着脱ぎ夕顔の白定まりぬ
夕風にふはり乗り行く天瓜粉
息ひそめ旱天に佇つ老大樹
片蔭を水面にこぼす舫ひ船

鈴虫寺　　宇田白鷺

風の来てゆるるは淋しアマポーラ
薄墨の滲みし処暑の写経かな
大根蒔く真白き雲の立ち昇る
新涼や生徒電車に吸ひ込まる
新涼や鈴虫寺の坂がかり

梅雨ごもり　　井上燈女

巻尺を伸ばしすとんと戻る梅雨
新聞紙丸めて入れる梅雨の靴
ちぎり絵に大きな西瓜貼り込んで
草いきれ気合を入れて鎌を研ぐ
梅雨ごもり創意工夫のある生活

とうきびワゴン　森本早苗

百余個の燻るランプや梅雨のカフェ
一目散にとうきびワゴン梅雨晴間
梅雨晴間特効薬はカフェランチ
凌霄の朱色に透ける雨のあと
推敲や文字摺草は右に巻く

夏山　臼井由美

夏山に入りてときめく汽車の窓
読経終へ僧もマスクをコロナの夏
連れ立ちし友は遥かよ夏の山
大樹剪り眺望戻る青嶺かな
曇天を押し上ぐるかに蓮の花

梅雨　十倉和子

ゴム長の我を侮る梅雨鴉
我もまた後手歩き梅雨鴉
梅雨はげし千年杉を押し倒す
打ち据ゑし筈のくちなは濠わたる
閼伽桶の真新しさに梅雨あがる

蓮の前　渡辺舎人

七夕や会ひたくてゆくホ句の会
星祝ひ自分のために絵本選る
肘先を武骨に相合へ夏の隅(くま)
いつの間に本奏となり真夏のジャズ
別な事考へてをり蓮の前

宿浴衣　町野広子

合歓の花堰に大きな真鯉二尾
花柄で若やぐ妻の宿浴衣
新入りは街の外れに張る夜店
路地路地に世話好きの居り水を打つ
水撒いて路地賑やかに暮れにけり

初嵐　池田雅夫

新秋のひと際眩し雨あがり
初嵐山の形の変はるほど
稲妻の一撃村の杉古木
新豆腐四角四面を尊ばれ
大南瓜出刃包丁の御出(おで)座(ま)しに

土用波　荒井倶子

荒鋤の土の尖りや大みみず
水溜りのやうな小流れ蛇苺
網戸風額に遊ばせ熟寝の児
甘噛みの犬と戯れあふ夏座敷
南溟より帰らざる父土用波

夏帽子　加藤むら子

旧友と訛の会話夏帽子
青柿や転ばぬための足捌き
藍浴衣古代を語る元教師
駅前広場年に一度の浴衣の輪
夏蝶の遊泳をする安心感

牧の牛　森川義子

朝焼にたちまち染むる千枚田
朝焼の光の中に牧の牛
祖父の世の陛下の写真夏座敷
薫風や昭和の唄を巻き戻す
傍らの出刃の鋭き洗鯉

薔薇の花　山田美佐尾

純白は花嫁のもの薔薇大輪
パリー祭帽子花咲く銀座通り
朝焼や鶏の啼く声耳元に
葛切や身の上話一しきり
船上のビヤガーデンや傘寿なる

蜥蜴　松宮保人

おちよぼ口少し膨らむさくらんぼ
仰天の蜥蜴慌てて尾を忘る
億年の進化の末か青蜥蜴
水無月や枯山水の砂の色
ラムネ飲む喉越しの泡弾けをり

梅雨空　川野妙子

今日も又梅雨空洗濯機の音
梅雨空にむかひて叫びたき事も
つまづきてよろけて摑む汗の腕
かたことの幼子通る父母と
見る者のすべて愛しき夏の夜

白南風　内田恵子

白南風や羽生ゆるまで漕ぐペダル
流木は骨片となり旱川
神域の水吐く石兎宵涼し
理科室の目を剥くどくろ明易し
熱帯魚の前で踊り子一休み

望の月　松本光子

閻魔王の肩に守宮や我を見る
古屋の夜守宮は壁に父母まもり
犬も四肢揃へて見入る望の月
疫病や法鼓打ち出す夕焼し
産院のしばらく休診柘榴熟る

夏の怪　伊藤敦子

オペの日に救急搬送夏の怪
病窓に久に拝めり夏の空
屋上庭園わたしの基地よ鶏来る
夏の真夜雲中菩薩の亡夫の来て
間おき粛粛コロナの原爆忌

日の盛り　川崎道子

がら空きの循環バスくる日の盛り
撫で肩にすべるショルダー日の盛り
托鉢の殿に蹤く黒揚羽
山門の鯱の尾欠けて日雷
炎天や天水桶の水目減り

晩夏　岡野順子

踏切のきんこんかんも晩夏かな
晩夏かな杖の一歩を慎重に
蚊取線香己が身溶かし意志通す
晩夏かな道草の人ちらり見る
ボール一個忘れものめく晩夏かな

☆

☆

季音花

夏蝶　福田千春

躍進の子は夏蝶か高く飛べ
告白の呂律怪しく黒ビール
マカロンなないろ巴里祭の銀座裏
竜宮にも毒持つ魚沖縄忌
朝涼やツリーハウスで点つるお茶

清水　松井由紀子

揺らめきを軒に届ける庭清水
茶の味の拘り談議井戸清水
草清水けものの背の見え隠れ
杣道は太古の匂ひ山清水
清水汲む里訪ひし日も離(さか)る日も

盆踊り　井口俊晴

盆踊り母によく似た手の捌き
小さき町小さき太鼓や盆踊り
ゆらゆらと乙女を狙ふ毒くらげ
腹の中隠すことなき海月かな
炎天を焼き立てピザのバイク来る

矜持　正木萬蝶

いくたびの転生またもなめくぢり
息切れの少し艶めく夏山路
僧兵の末裔もゐて夏の比良
地球から溢れ出てゐる夏の海
でで虫の矜持の角の長さかな

銀座の黄昏　梅澤佐江

真清水を飲むや命の透きとほる
木曽暮色宿の浴衣にねずこ下駄
もう既に金魚と言へぬ大きさよ
葛切や古都に風呼ぶ硝子鉢
蜜豆や銀座路地裏黄昏るる

ピタゴラス　近藤徹平

縦走路しばし外れて岩清水
心友なれど出来ぬ相談女郎蜘蛛
前の世の闇の思ひ出蟬の殻
葛餅はなべて三角ピタゴラス
天元に白石をうち夕端居

夏の海　菅原知子

大声で靴脱ぎ駆け出す夏の海
五能線夕陽落ちゆく夏の海
高校野球の歓声を待つ青き空
でで虫のひと筆書きでＩＬＯＶＥＹＯＵ
短夜を眠れずラジオ深夜便

渋色　野口和子

感染病溢れ帰省子ままならず
しがみつく五体満足蟬の殻
揚花火窓を閉めればまた揚がり
秋暑しおひつに移す白ごはん
渋色の迎へ提灯盆支度

朝焼け　井上玲子

朝焼や潮目境に魚跳ねて
朝焼や遠くに光る穂高岳
鬨の声ひそむ城址や未草
睡蓮に秘むる仏心さざれなみ
蜜豆や窓に潮騒引きよせて

茗荷の子　田中章嘉

茗荷の子雨に葉隠れ武士真似る
茗荷食べこの世の憂を忘れたし
七夕や正宗公がウインクす
阿弥陀仏座禅に小さき蓮の花
骨董の中に眠りし竹婦人

ひつじ草　熊倉千重子

一降りにいよよ真白きひつじ草
濁流はまさに大蛇（をろち）よ梅雨最中
花柄の傘にはれゆく梅雨の憂さ
つぎつぎと笑むベランダの鉢の花
バルコニー二人で語り合うた日よ

白ゆり　宮﨑チアキ

白ゆりのひと花ごとの気品かな
ぎこちなき下駄の足元初ゆかた
木下闇息せぬ白兎光りをる
闇を深むる古木の洞や木下闇
梅雨湿り圧せば応ふる脹脛

閑古鳥　西浦千枝子

郭公や歩幅を狭く獣道
生家へとどの道行けど閑古鳥
マネキンの服ねだる子や赤蜻蛉
朝顔や改築のカーテン短めに
電子音で始まる朝や牽牛花

清水　大塚茂子

片蔭の風もベンチも木の香り
岩清水一口ふふみうま甘し
逝きし兄庭師に徹し遠郭公
水曜日移動図書来る閑古鳥
老いてなほ人の恋しや遠郭公

パリー祭　石田慶子

夏の海バイクの二人日の出待つ
夏の海父の力作砂の城
竹箒軽くすべらせ夏落葉
さくらんぼ遺影の前に五粒ほど
ベルボーイの厚き胸板パリー祭

島　河野はるみ

朝焼や一番鶏にせかさるる
朝焼や西は夜陰を抜けきれず
豆抜きの蜜豆が好き巫女（すすめ）や
九十九島に海賊船や夏の海
軍艦島ぽつりと残る夏の海

ひぐらし　飛永鼓

蜩は林の中で鳴くがよい
かなかなの声に足先緩みをり
蜩や無住の寺のかくれんぼ
蜩や母の声待つかくれんぼ
蜩やうるさく鳴いて今日一日

南瓜の花　野平美紗子

昇る日へ受粉待ちたる花南瓜
ぽつぽつと風土記の丘の山法師
業平に縁の神社清水湧く
岩清水引きて釣り池峡の里
片蔭を川面に落す摩天楼

水羊羹　下川光子

緑蔭へゆつくり走る人力車
緑蔭をいつきに俯瞰ロープウェー
水槽に別世界あり熱帯魚
あづまやの風のもてなし水羊羹
黒文字を添へてきりりと水羊羹

浴衣　松山清子

雲の峰ビル屋上に麒麟立つ
万緑の堂宇に拝す太子像
マーガレットの咲き続く家今日も留守
姉たちも背丈縮みぬ宿浴衣
駄菓子屋に群れる小さき夏帽子

雨上り　上戸千津子

滝の水束ねて落つる雨上り
青蔦の覆ふ歴伝の里空家
海の日や故郷の名の魚買ふ
時鳥一声残し雨の中
久々に郷の為来り半夏餅

夏の海　中野彊

紫陽花の雨にふくらむ信濃かな
梅雨明けて鋭き山の起伏かな
初島の真白に光る夏の海
かき氷去年のやうに崩しけり
湖一周海賊船に愁思あり

青葉風　後藤綾子

夢の座に一句出でよと大昼寝
久々の銀座の匂ひ青葉風
片蔭を拾うて行きぬ乳母車
指栞して老鶯の声探す
夕闇に開く夕顔なまめかし

「水明発展基金」からのご挨拶

平素は当基金に格別のご高配を賜り厚く御礼申しあげます。

水明俳句会の運営は皆様からの誌代・同人費等のお支払いに加えて発展基金からの支援金によって賄われております。

会員の皆様の日頃からのご支援に対しこの場をお借りして改めて御礼申しあげますとともに、今後共引続き宜しくお願い申しあげます。

今月号に発展基金郵便振替用紙を同封致しましたのでご利用頂ければ幸いです。

令和２年10月

水明発展基金　会長
水明俳句会　主宰　山本鬼之介

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊 俳句界 2020年10月号

特集 鯨と酒とよさこいのくに ～土佐の俳人競詠
◎エッセイ　吉田類
◎土佐の俳人紹介
若尾瀾水…橋田憲明
右城暮石…茨木和生
◎土佐の俳人競詠
橋田憲明　松林朝蒼
橋本幸明　岡崎桜雲
味元昭次　姜琪東
亀井雉子男

特別作品30句　佐藤麻績

〈グラビア〉俳句界NOW　伊藤伊那男

追悼特集
後藤比奈夫
和田華凜　中谷まもる　金田志津枝
黒田冬史朗　高木利夫　柳生清秀
鍵和田柚子
新海あぐり　角谷昌子　依田善朗
今村妙子　小田中柑子　山田径子
山田真砂年

※セレクション結社　「嵯峨野」才野洋

私の一冊　山田佳乃「円虹」

対談　佐高信の甘口でコンニチハ！
古賀茂明（政治経済評論家）

別冊　投稿俳句界　一流選者14名！日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性があります。

株式会社文學の森
お求めは…●〒169-0075　東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

現代俳句鑑賞

網野月を

北窓を開ければ光薄曇り　寺澤　一雄

（『俳句』7月号・風神と雷神より）

人為と自然界の移り変わりの接点を描写している。もう既に降雪の雲ではない。それでも青空は期待できないのである。中七の「光」のありようを「北窓を開け」る人の行為と「薄曇」っている天候とに寄せて示そうとしている。中七から座五への切れは一読、ぶっきら棒の様であるが、座五の「薄曇り」がはぐらかしているようにも読めて作者の術中にはまってしまっているのである。

被爆せる夕虹を懸け死後の空　高岡　修

（『俳句』8月号・被爆せる虹より）

真摯に真剣に八月を考え続けている人の作句である。他に「八月の石の動悸を手でつつむ」がある。この作者の「石」は地球上の動物・植物以外のもののシンボルである。いわば非動物、非植物なのである。「石」は非生物の譬えなのである。であるからこそ座五の「死後・・」が理解される。七十五年経っても「被爆」の事実は不変であり、生きていることが偉いわけではなく、尊さを自覚することが大切なのである、と訴え続けているのだ。

口上のよき台湾バナナ買ふ　加藤　耕子

（『俳句四季』7月号・バナナより）

昭和三十年代、いや四十年代に入ってもバナナの叩売りというのが世間には残っていたようである。映画の主人公ふうてんの寅さんよろしくの光景である。日曜日のお昼過ぎの番組「大正テレビ寄席」で牧伸二が真似ていたのを覚えている方も多いのではないか。当時は、どういうわけか「台湾バナナ」の方が南米産などよりも美味しいということになっていた。掲句は過去の一コマを現在形で書いている手法である。実体験の内容については、俳句では現在形で書くことが出来る場合があるのである。

落丁の乱歩全集春惜しむ　山本　潔

（『俳句四季』8月号・ポークカツより）

今世紀になっても全集が出版され続けていて、流石に名作揃いである。落丁は、試験のような特別な機会でもない限り初めに改めたりしない。作者の場合も読み進めて行くうちに気付いたのである。普通、奥付には「乱丁本・落丁本は御取りかえいたします」とあるので取り替えたいのであるが、直ぐに先も読みたいし、我慢してしまおうかと悩むところで

ある。座五の季語「春惜しむ」が効果大である。

五月闇とは畳まれし帆のやうに　中村　安伸

（『俳句界』7月号・青人草より）

切れのない句であるが、座五の「……やうに」の後に余韻を作り出している。「……やうに」という副詞的な用法であるから、動詞が省略されているかたちで、筆者なら「次のチャンスを待っている」と補って読みたい。むろん読者に任されている部分であって、それに拠って句意も変化する。

新しい生活様式稲の花　荻野　樹美

（『俳句界』8月号・山の靄より）

上五中七と座五の季語との取り合わせの句である。上五中七の意味は文字通り時事の趣であるが、一考すれば、稲文化も千数百年前に日本に移入されたもので、当時としては新しい文化であり、新しい生活様式を導入する切っ掛けになったものである。として読み進めると同質のものを取り合わせたことになる。一方で時間軸を現在に固定すれば、人類は「新しい生活様式」に邁進しつつ、稲は今年もまた変わらずに花を付けた、と読むことが出来て、対照物を取り合わせたことになるだろう。

レタス買ひ夕陽へ歩く普通の日　関根　誠子

（『俳壇』7月号・普通の日より）

座五にも用いられた措辞「普通の日」と言い切っていることで、将に普通の言葉を詩語に昇華する効果を引き出している。そもそも定型詩の要諦は、普通の言葉を詩語にする機能にあるのである。

再会の握手に力夏の空　吉田　成子

（『俳壇』8月号・再会より）

作者が握手に力を込めたのか？それとも力強く握られたのか？その両者であるのかも知れない。「握手」は右手同士でするものであるから。決して一人では出来ないのである。右手と左手では出来ないのである。それでは意味も存在しない。「握手」に象徴される強力な友好的関係性は、込められた両者の手の「力」に匹敵する。この力量は夏の季感で受け止めないと受け損なってしまいそうである。

君ずつと笑ひ顔なり秋の海　橋本　直

（句集『符籙』より）

中七の後に切れを作って、座五の「秋の海」で受けている。上五の「……ずつと」の時間がどれほどのものを想像するかで、受け切れているのか、もしくは「秋の海」の質感が決まってくる様に考えられる。そういう意味では、句の中に決定的なスタンダードが存在しないのである。言い換えれば相対的な構図を成している。作者の印象の中には「笑ひ顔」しか残っていないのであろう。他に「コーヒーが冷めてワインが来て朧」「幾らでもバナナの積めるオートバイ」がある。

新同人紹介

―― 令和２年 ――

飯田忠男

水明入会　平成二十九年
所属句会　手ほどきの会

夏の雲俳句に向かふ直心

静止画か炎暑の昼の交叉点

下駄鳴らし渡良瀬川を渡る夏

秋ヶ瀬の秋秋秋の秋日和

屋久島の夕焼眼下の雲燃やす

「同人に推薦したよ」と主宰からメールを頂き「まだ十年早いです」と返事したのですが目上の方には逆えません。三年前、店のお得意様の山中順子先生のお口添えで俳句のはの字も知らない者を「手ほどきの会」に入会させていただき、鬼之介先生始め諸先輩のご指導いただいております。足手纏いのやっかい者ですがよろしくお願いします。

川村　治

水明入会　平成二十六年
所属句会　花衣の会

春の宵思はず寮歌口遊む

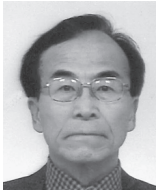
大空に舞ふや学帽風光る

秋晴や親子は土手で大の字に

十才の曽孫の手料理敬老日

添書に白寿とありし賀状来る

今度同人に加えて頂き感謝申し上げます。老骨に加え句歴も浅く未熟ですが何とか皆様の驥尾に付して参りたいと思います。これも吾句会のお陰なのです。大村節代先生のお人柄と面倒見の良い田中章嘉幹事のもと和気藹々と誠に楽しい句会があればこそ続けてこられました。これからも句友の皆様と共に頑張って参ります。



佐藤克之

水明入会　平成二十九年
所属句会　櫟の会

初彼岸遺影掲げて墓参

夏蝶の夢は天上ふはり旅

木の葉髪老いも病も道づれに

夏の山急登越えは命がけ

郭公の声爽やかに良き目覚め

俳句は難しい、特に季語があるため一層むずかしい。何とか一山超えて広い平野に降り立ちたいとの望みを叶えたいとの思い。

未だ同人としての自覚はありませんが、自分なりに同人に恥じないよう句作に努力していきたいと思っております。

斎藤みよ

水明入会　平成二十一年
所属句会　花衣の会

和やかな両家見詰むる雛かな

花の雲大和の国は絵巻めく

子燕が話題をさらふ駅舎かな

四万十川の舟旅楽し鮎旨し

夏雲や擬宝珠に志士の刀疵

入会当初、水明誌が届くと初心者の私が読むのは「水明集」が中心でした。徐々に読むページも増え、今は他の欄も楽しみになっております。

コロナ禍で、大半を在宅で過ごすこの頃、ゆったりと句作りに時を過ごせるということがとても有り難いです。

これからもご指導よろしくお願い致します。

菅原卓郎

水明入会　令和元年
所属句会　大宮読売俳句教室
（現・りんどう俳句会）

六地蔵ことし誂ひ更衣

断捨離へ背を押したる更衣

山門を覆ふ紫陽花パレット状

短夜に野良働きがひとつ増し

片蔭を行く大乳母車顔四つ

今回同人にご推挙を頂き、只々驚いている次第です。テレビに感化され、俳句教室に通い出しましたが、毎回聞きなれぬ言葉に戸惑いを覚えました。諸先輩の一字一句に感心し、ついていくのが精一杯です。順子先生の的を射たご指導の下、多少なりとも成長を出来ればと思っております。今後共、ご指導の程宜しくお願い致します。

杉浦理恵

水明入会　平成三十年
所属句会　第一例会・第三例会・第五例会・若松句会

師の背追ひ銀杏踏みつかな女の碑
師に賜りしうさぎ守りを月照らす
青田そよぎて信号待ちも楽しかり
たうがらし好む娘や虫付かず
こつくりとメトロノームは目借時

此の度は、同人に御推挙頂き、大変恐縮しております。東京水明の方々に憧れ、御誘い頂き、喜び勇んで始めたものの、倒けつ転びつ。俳句の国のアリスさながら。鬼之介先生の温かく忍耐強い御指導の御蔭で、何とかここまで参りました。各句会の素晴らしい先輩方に、心より感謝申し上げます。

鈴木藻好

水明入会　平成二十八年
所属句会　あゆみの会

金婚の二人の笑顔風光る
風光る太極拳の指の先
香水の漂ふ宵の銀座かな
まだ負けぬ西瓜の種の飛ばしつこ
ボス猿の足下に戦ぐ秋の風

俳句の初心者中心の同好会に参加して以来、これまで気にする事もなかった単語、言葉の用法に出会い、俳句の面白さ、奥深さを感じる反面、俳句への迷いが生じております。迷いの出口を求め今後も句会に出させて頂こうと思っております。

今後とも宜しくお願い致します。

武田重子

水明入会　平成二十九年
所属句会　あゆみの会

桜貝稚の拳の柔かき

南天に光るオリオン春寒し

涙する吾子の門出や鳥帰る

夏野駆く赤きリボンの女の子

旅の地のマリアに祈る終戦日

シニアのコミュニティーの一つとして、俳句の会が発足いたしました。

思いも寄らず私も仲間に入れていただきました。情景を十七文字で表現するのはとても難しいですが、楽しませていただいております。

これからも宜しくお願いいたします。

千坂平通

水明入会　令和元年
所属句会　新樹の会

冬座敷明治の祖父が語りかけ

ありし日の母の手想ふ冬至の日

早春や枯山水に水の音

吾もまた人生半ば渡り鳥

せせらぎの秋の蛍に星重ね

皆様　はじめまして。令和元年に入会させて頂きました。動機は時間がたっぷりあるので、一人で楽しめることは何かと捜していたところ俳句に出くわし、挑戦してみようと思い立ちました。俳句は奥行きが広く、難しいところも多々ありますが、前向きに取り組んで行きたいと考えています。今後とも宜しくお願い致します。

外村紀子

水明入会　平成三十年
所属句会　大宮読売俳句教室
（現・りんどう俳句会）

白き手と白きうなじや風の盆

短夜や遠く聞こゆる胡弓の音

行く秋や白樺の幹くつきりと

絵画館銀杏黄葉も展示品

かくれ里昭和のままの十二月

水明に入会して二年経ちました。この度同人に推挙頂きありがとうございます。まだまだ未熟で、同人は荷が重いのです。俳句作りは苦しみです。何とか自分の描きたいものが十七文字で表現できるようになりたいと思います。順子先生、教室の先輩の皆様よろしくお願いします。

仲田利子

水明入会　令和元年
所属句会　大宮読売俳句教室
（現・りんどう俳句会）

草萌ゆる唐津の丘の古代窯

薫風や繙く最新版の辞書

風涼し円空仏の鑿の跡

五絃琵琶の音色乗せたき小春風

枯蓮活けて花展の華となる

今まで指導者の居ない地域の同好会で俳句を楽しんでいましたが、先生についてしっかり学びたいと思っていたところ、縁あって水明に入会することが出来ました。山中順子先生の温かいご指導の下、俳句の楽しさ、苦しさ、厳しさを感じています。俳句のおかげで物事を良く見るようになりました。今後とも宜しくお願いします。

湯浅　和

水明入会　平成二十八年
所属句会　あゆみの会

風光る湾にはためく大漁旗

茅葺を包む朝もや蝉の声

遊園地風船枝に夜の秋

張り替へし障子に猫の爪の跡

日向ぼこ無心に野菜の皮をむく

この度新同人としてお仲間に加えていただき、うれしく感謝です。俳句のいろはもわからず、季語の知識も無く、恐い物知らずで入会してしまいました。境延昭先生のご丁寧なご指導にも拘わらず進歩のないヨチヨチ歩きですが、これからも前を向いて歩いて行きたいと思います。よろしくお願い申し上げます。

特集　どう詠み、味わう？　忌日の俳句

追悼企画　追悼・鍵和田釉子

◎巻頭作品10句

秋尾　敏・石渡　旬・笹瀬節子
嶋田麻紀・成川雅夫・藤本美和子
星野恒彦・矢島　惠

俳壇

10月号

9月14日発売
定価900円（税込）

巻頭エッセイ
マブソン青眼

八木健選　滑稽俳壇

四季巡詠33句［第Ⅱ期］…宮坂静生・柴田佐知子

連載

思想としての虚子……中村雅樹
続々・日本の樹木十二選……広渡敬雄
わが俳句道・わが金言（モットー）……佐怒賀正美
先人のことば……松尾隆信
俳壇史エピソード……坂口昌弘
季語への供物……井上弘美

俳壇時評……堀田季何／俳壇月評……辻村麻乃

俳句と随想12か月　野中亮介・武藤紀子

本阿弥書店　〒101-0064
東京都千代田区神田猿楽町2-1-8 三恵ビル　電話03（3294）7068 振替00100-5-164430

俳誌望見

梅澤　佐江

『野火』　令和二年七月号　通巻八八六号
主宰　菅野孝夫　発行所　埼玉県春日部市

昭和二一年六月、篠田悌二郎が創刊。師系篠田悌二郎。「新鮮なことばで二一世紀の抒情を追求する」を理念とする。（月刊）

主宰句「成れの果」一六句より

雪形や一本欠けて馬の足

長野県白馬岳の馬の雪形は代掻き馬として田植え前の農作業開始の目安とされているが、融け出して後足が崩落したのであろうか。待ちに待った春はもうすぐそこに。

鉄アレイ片手三キロ草青む

萌え出た草が青々と伸びて春の到来を実感する庭先、高揚感で日課の片手三キロずつの鉄アレイでの体力増強エクササイズに余念の無い作者である。

ただ突つ立つてたんぽぽの成れの果

道端や土手などに良く見られ、多くの子供達に愛されるたんぽぽ、絮が風に舞うさまは詩情を掻き立てるが、茎のみになると寂しく落ちぶれ果てた姿のようで哀れさえ感じる。しかし、根は生薬として使われたりノンカフェイン珈琲となるのではあるが。

羽抜鳥まことしやかのしたり顔

鳥類の羽は繁殖期の終わった夏から抜け替わるのだが、どうだ涼しそうだろうと得意顔の様子、鳥肌が見える程に抜けた姿は滑稽にも哀れにも見え思わず笑ってしまうのである。

山羊の子に生後三日の風薫る

生後二～三時間で立つ山羊の子、三日もすると飛び跳ねて遊ぶようになる。青葉の中を吹き抜ける清清しい風が子山羊を優しく撫でてゆく。

浮草の流れて水も流れけり

「方丈記」の冒頭の一節を彷彿とさせ、万物は流転するという無常観や人生哲学を感じさせる。

深海集　二七名　各七句より　三名を一句ずつ

花よりも足元注意さくら土手　鵜沢　よし江
シュレッダーに過去のあれこれ春愁　大谷　のり子
郵便も人も来ぬ日の柿若葉　山口　あつ子

蒼茫集　三九名　各八句より　三名を一句ずつ

春満月不祝儀袋買ひに出て　近江　文代
筍にふるさとの土生湿る　長谷部かず代
銀皿にぼんやり濡れて葛桜　伊藤　泰子

春蟬集　六二名　各八句より　三名を一句ずつ

甘き香に低き羽音や熊ん蜂　古橋　純子
春昼や眠気覚しのストレッチ　長谷川　悦子
連休の休み疲れや牛蛙　戝間　和代

野火集　九一名　各四句より　三名を一句ずつ

古希過ぎてをり蒲公英の絮を吹き　荻洲　啓子
妙宣寺資朝の墓草茂る　高嶋　和子
春の日のレコード盤の歪みかな　斎藤　百合子

純粋性の把握の確実さ、情感の奔放さと清新さ、観察の正確さ、言葉の選択の佳さを以って常に新鮮な抒情を追求するという主張が伝わってくる。さらに、野火集会員の五歳の俳句に目を見張った。

山本　鬼之介　選

夏季競詠

兼題

「郭　公」傍題可
「　進　」（詠み込み）

郭公や池塘は神の凹レンズ　　和歌山　大橋　廸代
郭公に間髪いれず鳴る神鼓
辿りよむ君の絶筆遠郭公
郭公鳴く母が写経の二十巻
時の日の三分進む鳩時計

捺染の老舗の暖簾閑古鳥　　さいたま　青木　鶴城
「休業」の紙の重さや遠郭公
羽抜鳥進退を問ふ出納簿
転進の決意の時やほととぎす
閑古鳥やつぱ谷より山が好き

雲の峰進水船の晴れ姿　　川口　矢作　水尾
雲の峰進水式の銀の斧
山一つ越え郭公の声揃ふ
郭公や己が谷に啼き返す
半島の濃き繁みより遠郭公

進呈の文字をしをりに明易き　　大阪　由良ゆら女
峰雲へ急発進の哨戒機
進み出て籤改めの麻衣
高原の風を五臓にかつこ鳥
郭公にふくらむ岳や河童橋

ミドミドもシソシソもあり閑古鳥
郭公や音痴が紛れ込んでゐる
耳奥の進軍ラッパ呼子鳥
半券を栞代はりに閑古鳥
郭公や言ひたかねえなら聞かねえよ

さいたま　網野　月を

郭公啼く金山銀山銅山に
郭公やぽつんと一軒家の秘密
郭公やまだ泣きやまぬ水子地蔵
郭公や眠らぬ眠狂四郎
よく動くでで虫トルコ行進曲

横浜　正木　萬蝶

遠き日の進軍の道夏の霧
秩父嶺の今日よく晴れて閑古鳥
郭公や紫紺深まる山上湖
渓流の釣り糸光り閑古鳥
郭公や渡り切つたるかづら橋

川口　森川　義子

好きな木の好む秀の風郭公啼く
郭公の畑たつぷりと空がある
色里に隣る里坊閑古鳥
郭公一声忘却の歳月を聴く
耕人のひとり残して夕郭公

さいたま　山中　順子

小面が時に鬼面に遠郭公
寄進さる金銀泥絵かんこ鳥
郭公や筆の穂ほぐす手の真白
郭公鳴く風に誘はれだるま船
有り物ですます夕げや閑古鳥

さいたま　大村　節代

郭公の声オンラインより紛れ込む
黒南風やデモ行進の蛇行せり
夢の国は進入禁止土用波
ソプラノで返す谺や閑古鳥
ソーダ水新進作家走り出す

川口　野田　静香

勧進帳唱ふる至芸宵祭
堂々と進の一文字白扇子
進み出て捧ぐる花輪百合匂ふ
受話器より元気出せよと遠郭公
郭公のテノールで鳴く山上湖

さいたま　柚木　治子

天道虫の星を肴に進化論
ダム完成渓に再び閑古鳥
郭公や足取り軽き一合目
遠郭公木道白く続きけり
見沼田に郭公の声母のこゑ

日高　道を

練り進む二十五菩薩来迎会
入定の窟幽暗遠郭公
膝頭抱き思案の羅漢郭公啼く
カタカナ語を耳が厭へり閑古鳥
進み癖のつきし時計や青水無月

さいたま　丸山マスミ

閑古鳥病室の窓開きゆく
この街に夢仕掛けたり閑古鳥
郭公の声にガムラン合はせたり
盆僧へ精進肴包みけり
晩学のなほ進まざる溽暑かな

松井由紀子

進物の鯵のくさやの置きどころ
前へ進め前へ進んで涼しけれ
郭公や西の空より雲切れて
禁猟の旗ひらひらと遠郭公
沃土なる豊葦原の遠郭公

さいたま　石山かつ子

かつこ鳥山へ延びたる牧の柵
「あれ」「それ」で進む対話や冷素麺
膝笑ふ鎖渡しやかつこ鳥
めまとひや進学塾に非常口
郭公の川の向かうに石切場

境　延昭

鎌倉へ何の注進青嵐
木曾塚に哀しき謂れ閑古鳥
遠郭公里宮を発つ御嶽講
郭公の声を薬味に蕎麦処
精進の汗快き結願寺

さいたま　五明　昇

見はるかす瑠璃の池塘や遠郭公
いきなりのくちづけ郭公研して
それきりの郭公青き静寂かな
郭公の木霊明け行く上高地
閑古鳥山のホテルのオムライス

東　京　山中みどり

耳打ちの膝を進めて京扇子
青ぐもり遠郭公の木曽路かな
閑古鳥糺の森の風澄めり
郭公やチャペルに響く祝婚歌
閑古鳥育ての親のうるはしき

久　喜　梅澤　佐江

郭公の木霊を聴けば母恋し
白杖の進みゆく先虹立ちぬ
郭公や恋しき父の声知らず
月山の濡れし木道遠郭公
郭公の我を呼ぶよな山の畑

さいたま　西幅　公子

郭公や旅寝の窓の白みゆく
絵具とく池の青さよ遠郭公
郭公や母の呼ぶ声かも知れぬ
人類は進化の途中かたつむり
合はせても進む時計よ合歓の花

熊谷　越田　栄子

郭公や森の小さな美術館
文豪の鄙びし館遠郭公
本箱は司馬遼太郎居遠郭公
風孕みヨットの進む大海原
バイヤーと商談進めバナナかな

さいたま　山田美佐尾

進み出て名告を上ぐる蟇
郭公と谺のカノン谷深し
飯盒の焦げもまた美味郭公聴く
往還をのそりと進む蟇
落葉松の雨にくぐもる遠郭公

高崎　原田　秀子

遠郭公森のしじまを深くせり
土偶にも叫ぶ口あり遠郭公
非通知てふ通知ありけり閑古鳥
進軍の一糸乱れぬ炎天下
信号は進めのサイン昼の雷

さいたま　石井　喜恵

郭公に囃され浴びる朝の風呂
追懐の湖畔に佇ちて郭公聴く
遺影に手合はす忌日の遠郭公
産土の夜の静もりに聴く郭公
郭公や老楽の詩書き綴る

神奈川　鈴木　康世

郭公に心痛まぬ日のありや
遠郭公深き懺悔の声と聞く
郭公や輪唱洩るる五時間目
フルムーン遠近に聞く閑古鳥
進物のさうめん金の帯を巻く

神戸　森本　早苗

郭公や四方翠嵐の最上峡
郭公の声ととのはぬ朝まだき
落人の裔住む谷間閑古鳥
説法のほど良き間合閑古鳥
白南風や進水を待つ練習船

さいたま　大場　順子

郭公や御巣鷹山の慰霊塔
郭公や暮れゆく村の遠灯り
青嵐勧進帳の武蔵坊
進退を決めし老農青田風
にはたづみ避けて子鴨の大行進

保坂　翔太

朝な夕な郭公の啼く我が住まひ
生涯の行進ゆるり夕焼空
日暮れてもなほ郭公の啼きつづく
進軍ラッパ今も耳底に夏の雲
郭公や娘の料理「チリコンカン」

松本　波多野寿子

夕空へ啼く郭公の孤高めく
建て急ぐ槌音ひびく遠郭公
天辺の郭公一刀彫の容
輪唱の輪が融合す遠郭公
郭公の来し大欅ふるさとは

さいたま　茂木　和子

郭公や一両電車の停まる駅
寝覚め良き散歩の杜にかつこ鳥
郭公鳴く山城跡の展望台
梅雨晴や安宅の関の勧進帳
コロナ禍や前進できぬ沢の蟹

若狭　松宮　保人

新樹光寄進の法衣さらり着て
勧進帳の嘘も方便ほととぎす
サイロ二棟引き合うてゐる遠郭公
髪洗ふ彼女の恋は進行形
新進の彼のマジック夏料理

さいたま　星野　和葉

おもてなし峠の茶屋の閑古鳥
郭公のフーガ深山は浅緑
とにかくに進路瞑想して夏行
郭公の谺の中の無人駅
喧し野辺の送りの閑古鳥

さいたま　加藤でん治

白樺の奥へ奥へと遠郭公
進むことのみの日日なり蟻の列
わが恋は進行中なり星まつり
軍隊手帳古びて紙魚の進まざる
敗戦日進軍喇叭の音消ゆる

横浜　永野　史代

郭公に鳴かれて決める坊泊り
郭公の次の一声待つ瀬音
郭公鳴く飛騨山中の暮れ速し
進退を決めかねてゐる蟻の群れ
進化論熟読したし草蜻蛉

さいたま　栢尾さく子

郭公の声聴き澄ます鑑真像
郭公鳴きパン焼き上がる森の朝
郭公や清らな馬の水呑場
切株にリボンの帽子夕郭公
夕郭公広間にそろふ朱塗膳

和歌山　十倉　和子

郭公や夜汽車の仮寝明け初むる
余所者となりし故郷や郭公鳥
校長の訓辞遮るかつこ鳥
闇深く進む潮来の蛍舟
ひと夏の恋に乾盃かつこ鳥

大和　藤澤　喜久

補聴器を外し聞き入る初郭公
郭公やまだ眠さうな馬の首
墳丘に陽は安らけし閑古鳥
郭公や朝食早き山の宿
艇掲げ進む縦列雲の峰

千葉　森田　祥絵

母屋まで膳を運ぶや遠郭公
閑古鳥胸板共鳴しつつあり
郭公の止みて躙り口にじる
紛れなくくちなは進む草の薙ぎ
夏手袋ひらり進呈処女句集

さいたま　椎野美代子

滓刺と父の歩進む青田道
帆で進む船の世紀よ夏の海
刀匠の眼炯炯かつこ鳥
郭公を遠く近くに聴く実家
亡き友の夢から覚めて閑古鳥

平塚　丸屋　詠子

対岸の森にゐるらし閑古鳥
閑古鳥八十路の先の道険し
郭公の声の近づく山の宿
片陰を拾うて進む乳母車
油照り進まぬ無事の長電話

杉戸　佐々木史女

トテ馬車の進む山道夏蓬
木の葉石郭公の声も閉ぢ込めし
郭公や故郷の母へ便り書く
万緑を掻き分け進む峠道
郭公の森に艶ある子等の声

さいたま　高島　寛治

進呈の句集繙く夏木立
凌霄の進路は蔓の風しだい
進水式シャンパン「ぽん」と夏の空
郭公や学舎となりし無人駅
郭公や札所の寺の奥の院

若狭　鳥羽　和風

郭公の祈りめく歌ゴスペルか
郭公や慶喜公の墓処は此所
郭公の喉声尊うと水茄子漬
己が役終る悲しさ閑古鳥
妻の遺品進まぬ整理紫微の幸

さいたま　吉住　光弥

郭公や山ふところに木地師村
郭公や木霊のあそぶ杜ふかし
郭公や谷の吊橋ゆれやまず
郭公の声谺する奥の院
虹立つや先達進む行者道

明石　田寺　玲子

剥落の進む晩夏の太子像
郭公や艶めく声を野に放つ
郭公に耳を凝らして筆とまる
山の湯の声のかそけき閑古鳥
進級の子等の目笑むや風五月

熊谷　神田　治江

郭公へ「かつこう」返す下校の子
夕郭公亡夫と植ゑし杉林
郭公や文字の褪せたる学者の碑
くちなしや乗らぬ自転車錆進む
海底を浚ひ進むや蜆舟

若狭　島津　初花

郭公の声は善きかな季節めく
郭公の声三度してそれつきり
郭公や子供の頃のやまご釣り
郭公や地球の異変じわりじわり
進化せぬものに人また沢の蟹

宇田　白鷺

郭公や橋の下まで尾瀬ヶ原
山小屋の雑魚寝尻目に閑古鳥
郭公の谺へ手繰る井戸釣瓶
水無月の杜に白々詠進句
進言を胸に若葉の丸の内

東京　菊池ひろこ

のつしのし蟇の前進たゆみなく
飴玉へ蟻の行進くろぐろと
朝の宿郭公の声こだまする
郭公の声に目覚むるテントかな
郭公に背を押されて峠越え

さいたま　井口　俊晴

郭公や木道をゆく靴の音
谺して郭公の声たてつづけ
閑古鳥駅舎の跡の転車台
朝採りのトマト進物代はりとす
夕虹や進水式を了へし岸

池田　雅夫

青嵐古刹に残る勧進帳
曼陀羅へ膝を進むる薄暑かな
水草を蹴りつつ進む通し鴨
点眼を右へは二滴遠郭公
郭公の啼きながら飛ぶ牧の上

相模原　町野　広子

英霊碑の特進少佐沖縄忌　　行田　近藤　徹平
かんそんの過客歓迎かんこ鳥
進化論の問ふ種の起源すいちゆう花
托卵の異母弟しのび遠郭公
二進も三進も行かぬ恋神鳴

鷲進の少年棋士の夏袴　　鴻巣　大塚　茂子
荻野吟子の医術の進歩雲の峰
遠郭公秩父連山藍深し
郭公や鬼石の谷の声清し
序文読みあとがきを読み閑古鳥

郭公や村は華やぎ澄み渡る　　若狭　飛永　鼓
徒に歳月進み半夏生
郭公鳴く村に若者住む噂
心急く進みてそこは岩清水
老眼の進み善悪見定めず

白球を追ふ山の合宿郭公鳴く　　草加　小倉　倭子
尾瀬沼の木道渡り森郭公
遠郭公一進一退俳句道
進学の天神の杜郭公鳴く
閑古鳥肘を突き合ひさやうなら

郭公や風土記の森を縦横に　　さいたま　野平美紗子
琵琶湖畔声の遠退く夕郭公
「勧進帳」跳ねて銀座の夏料理
母の忌の精進料理冷や奴
片蔭を拾ひて進み忍者めく

大吊橋渡りきるまで遠郭公　　横浜　福田　千春
進め進めひまはり畑の大迷路
郭公や山小屋で食むハムエッグ
猿なんて進化論なんて暑気中り
幼児の進化めざまし夏の雲

郭公やベンチに書読む異邦人　　さいたま　曲淵　徹雄
郭公を啼き止ませたる石礫
閑古鳥がき大将は今いづこ
緑蔭に風が進むる頁かな
用水に首浸からせて蛇進む

十和田湖をわたる谺や遠郭公　　井上　玲子
吊橋に受くる渓風閑古鳥
郭公と和して松韻須磨の浜
鈴を振り進む山路や夏の霧
東北へ進む窓辺や青田波

郭公や湖畔をめぐる馬車の来る
ペンションの夜明早むる郭公よ
進化する文具の話ビール干す
夏シャツの音楽隊よ進水式
郭公や古地図に残る塩の道

さいたま　橋本　京子

合掌を解けば郭公声近し
閑古鳥顔より大き笊を買ふ
入園式手を振り進む元気よく
遠郭公小さき末社の諏訪の神
縞蛇の進み消ゆるも声出せず

松本　光子

とめどなき独り占ひ閑古鳥
郭公の森カモミール淹れませう
道祖神の目鼻ちぐはぐ郭公鳴く
郭公や文字の掠れし道標
郭公鳴く旅行鞄の軽くなり

内田　恵子

参道は森閑として閑古鳥
遠郭公天狗の下駄は一本歯
郭公の声もご馳走峠茶屋
娑羅の花祖の名もありぬ寄進の碑
温暖化進む地球に水を打つ

さいたま　荒井　倶子

郭公や湖畔をぐるり豆画伯
進撃の「知覧」に若き蛍燃ゆ
郭公の声に輪唱はじめけり
三社祭ジグザグ進む白き足
閑古鳥今は主なきログハウス

さいたま　新　暦文

西瓜割りそろりと進む大男
滝風や進みて戻るかづら橋
郭公や馴染の店の昼間酒
一歩づつ進む夏野や試歩の杖
郭公や途切れし会話つなぐ間に

若　狭　檜鼻ことは

郭公を連れて富山の薬売り
この山に郭公の鳴く秘境の湯
閑古鳥女将の鬢のほつれかな
焙烙の煎り豆弾け閑古鳥
遠郭公「子規」も泣きたる野球場

さいたま　新井　孝麿

郭公やコロナと如何に付き合はむ
少年棋士の快進撃や雲の峰
嚙み合はぬリモート映像遠郭公
老眼のまた進みたる夜長かな
郭公やリフトで越ゆる県境

田中　泰子

街中を進む神輿のエネルギー
郭公や園児の散歩軽やかに
軽鴨の子の濠へよちよち進みをり
パリ祭のパレード進むシャンゼリゼ
托卵に心配なしや閑古鳥

さいたま　反町　修

郭公や低く静かに子守唄
分校のオルガン揺るぎ閑古鳥
托卵をさもないと言ふ遠郭公
ででむしや新築戸建進捗表
真つ直ぐに進まぬ吾の平泳ぎ

東京　石田　慶子

郭公啼く朝の静寂の真ん中に
産土の褪せし鳥居や郭公啼く
昨日とは違ふ郭公今朝の窓
居酒屋の主泣く閑古鳥啼く
遠郭公友の訃報の確たるものに

横浜　菅原　知子

野鳥観察先づ郭公の声捉ふ
郭公や染み染みと知る親の恩
閑古鳥森の教会扉開く
郭公や灯火ちらほら別荘地
風薫る隊形揃ふ行進曲

さいたま　岡田　宣子

かつこうの声のふくらむ雨上り
郭公に耳をあづけて庭いぢり
病窓で手を振る母よ遠郭公
道形りに進めとカーナビ夏の雲
木道を進めば白帆水芭蕉

さいたま　熊倉千重子

曙の静もる街や閑古鳥
郭公の声に始まるひと日かな
明るさと寂しさありぬ閑古鳥
治水利水の進化むなしき夏出水
前進の心で稽古のうぜん花

宮﨑チアキ

郭公や納経帳に朱印受く
耳鳴りを加齢と言ふは遠郭公
郭公の頬りに鳴けり朝の夢
郭公や新進気鋭の作曲家
予定通り進まぬ普請梅雨深し

若狭　山﨑　郁子

富士の野を匍匐前進雲の峰
鴨の子が亀に訊ぬる進化論
山荘の目覚めは早し遠郭公
郭公や牧の牛乳搾り立て
郭公の谺や山の露天風呂

さいたま　染谷　正信

菩提寺は村の真ん中閑古鳥
郭公の鳴いて目覚むる研修所
郭公の声尾瀬沼にこだませり
長梅雨のなか伐採の進む音
薫風や豪華客船進水す

上尾　横山　君夫

コロナ禍や計画未定の夏進む
青田風マスクはづして進む子等
郭公鳴くリモート会議進行中
出水川淀みへ進む巨き鯉
夏の雲姿勢正して歩を進め

和歌山　葛城千世子

郭公や錫杖鳴らす白装束
修験者の法螺に呼応の閑古鳥
郭公やまだ濡れてゐる木の根道
郭公やリフト下りるに手を貸され
飯盒炊くボーイスカウト閑古鳥

川崎　道子

遠郭公農学生の昼弁当
廃校の母校にひとりかつこ鳥
閑古鳥陶石探る谷間に
去り難し夕日の進む海の道
梅雨籠り精進料理で乗り切るか

伊予　向井　章子

山間のラジオ体操閑古鳥
競ふごと呼応するごと郭公啼く
素泊まりの老舗ホテルや遠郭公
迷ひこむ小さき城址や閑古鳥
粛々と葬列進む青嵐

東京　石川　理恵

郭公を聴くにほどよき木のベンチ
朝まだき夢の中までかつこ鳥
郭公の歌ふはワルツ森の朝
のんびりと進み葉裏へ蝸牛
これ以上進化のぞめぬ七変化

さいたま　塩野　久子

郭公の声を味方に峠越え
禅寺の真昼のしじま遠郭公
鎌倉の寺から寺へ閑古鳥
夏休み進学塾の鞄の子
炎天のマスク色々デモ進む

下川　光子

オンラインの子の進学や夏深し
郭公は予言者なるか森の中
郭公に誘はれゆく祖母の墓
遠郭公逝きし娘の呼ぶ声か
九十年進み進みて星祭

高橋　敏子

走り根の絡む山道遠郭公
湯の里を漫ろ歩くや夕郭公
山寺へ至る石磴閑古鳥
峰雲やゴールへ重き歩を進め
竹落葉進入止むる石ひとつ

さいたま　斎藤　みよ

夏深し亀の如くに漸進す
瑞山の清しき風や遠郭公
遠郭公友と久しく逢はぬかな
郭公や棚田の水のしやらしやらと
遠郭公不忍の池めぐりけり

東　京　鈴木　和子

無彩色の霧のふところ遠郭公
郭公につられ木霊す子等の声
父母の恩進まぬ整理紗羅の花
指先の駒盤上進む夏の陣
ＩＴ化の進む日常百日紅

さいたま　竹澤　和子

幸甚や平々凡々閑古鳥
かつこ鳥留守居の子犬寝るばかり
古民家や郭公と水のおもてなし
植田道進みネオンと温泉街
鮮やかに精進料理夏座敷

鬼　石　野口　和子

進み行く三本マスト雲の峰
甲子園に行進曲や夏の天
廃校の屋根の高さやかつこ鳥
島じまを啼き啼き渡る閑古鳥
進向を決むる手立ての落し文

草　加　河野はるみ

郭公の声遠ざかり母に会ふ
進化するかき氷屋の蜜多彩
甲子園真夏の球児進塁す
蚊食鳥列車進行遅らせる
進水式真夏の海の波静か

さいたま　梅澤　輝翠

中学生の進路の会話夕焼雲
進歩せし高き建物夏の町
郭公の峠越えして他郷なり
新道の完成近し遠郭公
閉館の湯宿にとどく閑古鳥

小　川　加藤むら子

遠郭公父の大き手つかみゆく
郭公や世界も日本も変りゆく
主なき山荘の窓遠郭公
遠郭公ランプの宿にたどり着く
郭公鳴く読みかけの本ふせしまま

さいたま　川野　妙子

郭公の啼かぬ日はなし昼茶漬
郭公や登山カードに記載なし
郭公の啼き終へるなり寺の鐘
郭公の啼く夜の宿坊金縛り
雨あがり進めば噎する麦の秋

さいたま　渋谷きいち

生家まで川遡り閑古鳥
犬に引かれどんどん進む青田道
郭公やドライブの窓全開に
郭公や双子の嬰のすくすくと
奥高野読経のあとの閑古鳥

和歌山　西浦千枝子

今はもう前進のみよ破れ傘
漁師町の溢路を進み南風受く
全校生六人の村遠郭公
木道はひとりの幅に遠郭公
土器を投げたる崖の遠郭公

東　京　松山　清子

郭公鳴く少し淋しげ高く飛べ
郭公や子に会えたのか今朝の声
赤べこや遠郭公にうなづけり
郭公の声に晴れゆく遊水地
郭公や牧の朝餉の玉子焼

栃　木　佐々木典子

郭公の次の声待つバンガロー
遠郭公水筒に汲む沢の水
郭公やどこでも停まる村のバス
郭公や田圃見回る父の帽
遠郭公沢の水ひく外流し

さいたま　笹本　啓子

林道を先導するやかんこ鳥
カッコーのこの町中（まちなか）のいづこより
鴉鳴き郭公の声掻き消さる
奥入瀬に郭公の声谺せり
柴又の路地裏進み金魚玉

飯田　忠男

郭公や三保の松原富士浮かぶ
郭公の育ての親の顔知らず
郭公の声も書き込む写生かな
港湾の工事も進む夏の雲
コロナ来て進路断たれし梅雨湿り

田中　章嘉

友情と恋が進行虹立ちぬ
進みゆく奥の細道雲の峰
かつこ鳥ひとつの唄を慈しむ
かつこ鳥ふと止まりたるペダルかな
かつこ鳥地球の底にふるさとが

所　沢　関根　千恵

この里も限界集落遠郭公
郭公や段々畑の菜を穫りに
郭公やリフトの眼下湖展く
郭公や街を統ぶるは電子音
この夏の球児の行進幻に

さいたま　本橋　稀香

求愛か明けの郭公けたたまし
托卵のチャンス狙ふかつこ鳥
夏空や機関車進む秩父路を
食進むワインと肉と夏野菜
元気出せ進め心の夏の歌

野村　美子

団子虫つつつと進みあぢさゐに
子を乗せしでで虫進めそら進め
進軍ラッパ鳴り響くやう御来光
誰に鳴く三分の理ありかつこ鳥
子の気持ち郭公に問ふ一人親

吉　川　杉浦　理恵

閑古鳥校庭やつと子供の声
郭公や俳号もらふ夢を見る
郭公や論考集に没頭す
郭公や自然の恐怖垣間見る
郭公の声聞き墓の掃除する

和歌山　南條きわゑ

あかつきにかつこ郭公とこだまして
夜明け前独壇場の呼子鳥
時進み青春の日は夏に消ゆ
雨もよひ蟻の行進終りなく
いざ進め蟻の軍列乱れなし

さいたま　臼田　みち

精進揚げの皿いつぱいに帰省客
進物用のメロンを持ちて恩師宅
片蔭をひたすら進み鉢合はせ
郭公や自転車の列応援す
常陸の山に入れば啼くなりかつこ鳥

森下美智枝

修験者の白装束や郭公啼く
郭公や女人高野を見守りぬ
藍染の暖簾は無言閑古鳥
送迎のお礼に一句郭公啼く
郭公や早くワクチン欲しと鳴く

和歌山　髙橋満耶子

厨ごとを始むる時間遠郭公
急かされて犬の散歩や遠郭公
クラクションにかき消されたり遠郭公
山深く思ふ存分鳴く郭公
夏休み吾子進んで手伝ひす

さいたま　高原　和子

郭公や母は強しと父笑ふ
急逝の友の化身や閑古鳥
黒蝶はさなぎの進化晴れ姿
進化する扇風機には羽根も無し
好物の鰻を前に食進まず

和歌山　嶋田　洋子

老い進む杖の下には捩り花
世界中ワクチン研究進む夏
天命を楽しむ湯屋で聞く郭公
補聴器にひびく郭公声はピュア
郭公の次の声待つ杉木立

藤沢　小島喜代子

谷戸に住み朝な朝なの遠郭公
今朝も鳴く郭公去年と同じ声
目をつぶり谷戸つていいね遠郭公
進路決まり子は晴れ晴れと夏休み
梅雨の庭進む構への白鼻心

横浜　川島　典虎

郭公の一声朝の夢うつつ
郭公の二声三声窓白む
車椅子窓へ郭公近くせむ
郭公や病棟隔つ木々濡れて
閑古鳥聞こえぬ老いの徒笑顔

山岸　弘子

瀬の音と郭公の声道細る
夏とんぼ進みし方に花ゆれて
進級も在宅のままオンライン
合歓の雨学童の列進みゆく
森伐られ郭公の声遠くなり

鬼石　榊原　聰子

躍進の少年棋士や夏衣
群れなして進路は南鷹渡る
郭公や信濃の森に三拍子
隠国(こもりく)の泊瀬(はつせ)声のみ閑古鳥
郭公の声に送られ始発駅

草加　外村　紀子

閑古鳥都会に住まふ子を案ず
露天風呂郭公ひびく朝まだき
糠雨や山を突き抜くかつこ鳥
風に乗り進む一すぢ蜘蛛の糸
松落葉機器の進歩に追ひつけず

さいたま　湯浅　和

新樹光「進化論」を読む少女
牧場の遥か郭公らしき声
売りに出す別荘地あり郭公
郭公にコロナの「禍」のままならず
新樹かな新進気鋭の人ならむ

東京　岡野　順子

高千穂の峯に木霊す遠郭公
秩父路を歩めば「カッコウ」遠郭公
奥山に分け入り聞くは遠郭公
朝まだき古都に澄む声閑古鳥
急登を進みて聞くは遠郭公

さいたま　佐藤　克之

放牧の牛に顔寄せ遠郭公
母恋ひて吉野の里の閑古鳥
石径を阿弥陀堂へと遠郭公
峡谷を進み鮮やか虹の滝
夕薄暑進入灯の明るさよ

川崎　鈴木　玲子

郭公や托卵の子親は何処に
郭公の声も乗り込む小海線
郭公が啼けば里山畠に出る
冷酒も進み寡黙な夫饒舌
容赦なく進む齢嵩梅雨憂へ

東京　河原　叔子

郭公やときに郷愁過りしも
雨を欲るかに郭公の日がなかな
故郷へ粗品進呈土用入
進化論現世に生きて夏の月

上戸千津子

郭公や生家見守る大欅
旅なかば野麦峠で聞く郭公
ケーブルカー登る途中の遠郭公
旅の野に寝転びをれば閑古鳥
行進曲聞かれぬ夏の甲子園

蕨　細井　良子

郭公の艶ある声が城址より
声ばかり姿も見せよかつこ鳥
蝸牛前進のほか知らざりし
鴨の子の行進に沸くビルの窓

神戸　井関　礼子

雲の峰進水式の銅鑼はしやぐ
郭公や祖に逢ひに行く奥の院
郭公の声ころげ来る山の湖
説法の拍子とるごと閑古鳥

大阪　伊藤　敦子

郭公は謀反のごと鳴かぬなり
文殻の灰の文字読むかつこ鳥
郭公に遅れ牛鳴く赤城山
竹落葉進化論めく地に落葉

狭山　矢島　清

郭公や別腹に食ぶ五平餅
大幅に遅れし昼餉遠郭公
尺蠖の吾が道を行く二進法
鵜飼火の一斉に闇を突き進む

さいたま　森　和子

郭公の啼き抜く森の深さかな
ことごとく叡山制す閑古鳥
東雲に郭公鳴きて出船かな
祇園会の精進料理笑み満つる

さいたま　藤岡真知子

郭公の鳴き声遠く朝白く
郭公の辻褄合はせ子を残こす
郭公が鳴くや英語のハイクラス
人類はどこへ進むか茄子の花

千坂　平通

郭公の幕開けの声里山に
郭公の声遠退くやローカル線
片蔭を乗せて進むや路線バス
夕顔の花生けて夜の進み行く

菅原　真理

祭笛寄進瓦に名を残す
奥まりて安房に秘境や閑古鳥
郭公や開拓村は孫世代
郭公や薬莢落ちてゐる山路

いすみ　平石　睦子

女子大のゼミの合宿遠郭公
美麗女史サルトルを説くかつこ鳥
郭公啼く戊辰戦士の往きし道
読み進むアジア紀行や夏の雨

越谷　阿部　幸代

浴衣着て輪の中進むきよし節
繰り返す今が我が世と郭公鳴く
聞き做しも違へようなき郭公は
郭公やコロナ移すな吹き飛ばせ

さいたま　長井喜代子

トルコ行進曲合奏初夏の音楽室
若き棋士の扇子の揮毫「進」優し
郭公の谺に目覚め山の朝
パンデミックの夏も進撃新棋聖

宮代　関谷多美子

遠郭公焚火の煙垂直に
郭公や水切り石が四つ跳ね
エンジンを切り郭公の昼下り
郭公や托卵の子は声優し

東京　山中いちい

風薫るしづしづ進む禰宜の列
混沌の世をゆつくりと蝦蟇進む
宿坊に大きな天狗閑古鳥
遠郭公子供歌舞伎を芝に坐し

さいたま　後藤　綾子

駅頭の発車進行朝の顔
老の道ゆるり前進やせがへる
なめくぢの光る足跡進行中
郭公や噴煙上る浅間山

東京　柳父　はる

朝まだき信濃路に入り遠郭公
信濃路を遠郭公の先導す
郭公の促す洗濯日和かな
五月雨や歩を進むれば投了に

さいたま　鈴木　藻好

郭公や畝を立て行く急斜面
郭公の声に鍬おく小昼かな
畝二本立てて終るや夕郭公
「ただいま」と引き戸引く音夕郭公

東　京　水落　守伊

老いらくの進む習はし花槐
靄晴らす郭公の声御射鹿池
托卵の攻防哀れ閑古鳥
里山に黎明告ぐるかんこ鳥

春日部　諏訪サヨ子

郭公に呼ばれ高尾の四号路
虹立つや弁慶読みし勧進帳
進む世に後退のみの夏落葉
進路変へむくりむくむく松毛虫

さいたま　綿貫ひさの

郭公の風ざわめきて雲白し
郭公や時折見ゆる登山道
進み行くスペースX夏銀河
進歩するAI知能木下闇

木村るみ子

腰までの水に進めぬ梅雨豪雨
三婆の旅の終りの遠郭公
一面の田郭公の声わたる
木道のわづかにぬれて遠郭公

さいたま　山下ユリ子

木道の一歩先へと遠郭公
朝寝坊遠郭公の目覚めかな
この道を六根清浄閑古鳥
法螺貝や一歩前進夏行かな

福田　育子

日本海波穏やかや郭公鳴く
生みの親知らぬ定めのかつこ鳥
進む世に負けじと生きる夏八十路
コロナ下の進路悩まし梅雨明ける

春日部　仲田　利子

郭公や樹海の骸沈みけり
波のりの進むあとさき水平線
ひとりでは育たぬものよ閑古鳥
郭公や再開を待つ神楽殿

東　京　飯室　夏江

郭公の鳴く声ソーシャルデスタンス
閑古鳥電信柱はなほ淋し
かつこうの鳴声重なることの無し
原発も科学の進歩か田草取る

町　田　瀬戸雄二郎

茂みから啼く声だけや閑古鳥
郭公や森に流るるレクイエム
郭公が迎ふる山の美術館
進水に歓喜の涙夏一日

さいたま　武田　重子

尾瀬ヶ原第一声を閑古鳥
病む友の食欲進む夏座敷
マイバック縫つて解いて閑古鳥
郭公のいづれ親子で海わたる

田中　タイ

農を捨て時は流れて遠郭公
郭公や地塘の尾瀬が明けゆけり
郭公の声を流して梓川
地蜂捕り平然と藪突き進む

小　川　藤間　友二

遠郭公緑の香りひろがりぬ
郭公や夜明けの色を呼び起こす
青空や向日葵畑進みゆく

さいたま　小駒さち子

郭公に口笛カノン風渡る
郭公の声にひんやり七合目
霊長の進化の果てや原爆忌

横山　礼子

進化する若き棋士なり夏座敷
進むべき道決められぬ炎天下
尾瀬沼の木道ゆけば遠郭公

東　京　畑宮　栄子

郭公の鳴き交ふ空や病癒ゆ
郭公を真似て「かつこう」露天風呂
花吹雪昇進の背を伸ばしけり

さいたま　篠﨑　紀子

猫の恋源氏絵巻を地で進む
対岸は戦のあとや郭公鳴く
合掌は無限の言葉郭公鳴く

伊藤　愛子

桑の実や進入禁止に守られし
角を出し進む速さや蝸牛
郭公に声を返せば谺せり

緒方みき子

新棋聖駒を進めて夏羽織
新築に進んで手締め青田風
郭公を頭上に聞きつつ峠越ゆ

落合　和枝

郭公や口笛返せばまた「カッコウ」
旅の坂背を押したる閑古鳥
這つてでも前に進めと蝸牛

大　阪　飯塚智恵子

郭公の鳴く声遥か湖畔にて
郭公やしらびそ匂ふ尾瀬ヶ原
夏合宿五分進める腕時計

さいたま　樋口　元美

夏季競詠の句ではありませんが掲載します

こだはりの蜜豆求め遠方へ
夕顔を友と楽しむ遊歩道
睡魔を払ひ月下美人の開花待つ
打ち寄せてきたる棚田の青田波
子と孫に吾が丹精の浴衣着す

小川　洋子

遠雷に静かに止まる観覧車
ファーブルになりて暫しは蟻を友
秋高し父子は土手で大の字に
終戦日母の安堵の皺の数
孫たちの初の手料理敬老日

川村　治

☆　☆

俳句
10月号
予告
9月25日発売
予価（本体864円＋税）

特別作品　宮坂静生・今瀬剛一・藤本美和子

大特集
私の「動詞」攻略法
柘植史子・奥坂まや・中岡毅雄・佐藤郁良・曾根毅

追悼
鍵和田秞子
▼人と作品…仙田洋子　▼50句選…村上鞆彦
▼一句回想…中村和弘・鳥居真里子・櫂未知子・関悦史

連載
名句水先案内…小川軽舟／偏愛俳人館…恩田侑布子
現代俳句時評…白濱一羊／野菜の十二ヵ月…南うみを
シリーズ　コロナの時代の俳人たち　塩見恵介・中内亮玄

電子版同時発売！　電子版は「BOOK☆WALKER」（https://bookwalker.jp/）など電子書店で購入できます。
発行　角川文化振興財団　発売　株式会社KADOKAWA　https://www.kadokawa.co.jp/

夏季競詠

山本鬼之介

夏季競詠の目的と意義

毎年十月は、水明全会員による夏季競詠を実施していますが、その目的と意義を理解していない会員がまだ多いように感じます。そこで、今後各位の出句意欲を更に高める為に、昨年に続き今年も骨子を明示します。

[目的] 競詠は、「大相撲トーナメント」と同様に、「兼題」を「土俵」に見立て、全会員が同じ条件で俳句を競い合う場、即ち年に一度の「水明場所」なのです。廻しを確りと締め、「水明会員」と「季音会員」とが四つに組んでぶつかり合ってくれることを望んでいます。新進作家が、奇襲作戦で季音雪欄作家を転がすのを見たいものです。

[意義] 通常の雑詠作品では比較しにくい技量の差を、兼題で条件を揃えることで見出だし易くなり、全会員が一堂に会して俳句を楽しむことが出来ます。

また、夏季競詠での成績が、水明賞や季音賞の選考過程において、巻頭に加えての重要な評価基準になりますので、その点を留意して下さい。

作品評

郭公や池塘は神の凹レンズ　大橋　廸代

池塘は高山や寒冷地の湿地にある池のことで、湿原の泥炭層にできる池沼のことである。日本では尾瀬の池塘が有名だが、他に北海道の雨竜沼湿原や岩手県の八幡沼湿原の池沼などが知られている。池塘の成因について調べてゆくと、地質学の専門分野に入り込むから、取っ掛りでギブアップしてしまう。面倒な講釈は横に置いて、池塘を万物の創造主である神が成したものとした掲句に納得させられた。池塘の形状を凹レンズと表現したことで、降り注ぐ陽光を反射させている池塘の様子が、臨場感をもって伝わってくる。

捺染の老舗の暖簾閑古鳥　青木　鶴城

何代も受け継がれてきた料亭か、それとも和菓子舗だろうか。郭公が鳴いていることを前提にすれば、地方都市の元城下町の一劃にある格式のある料亭が相応しい。江戸時代には藩の上級武士が、明治の頃は立派な八字髭をたくわえた県庁の役人が使っていたことだろう。技巧を尽くした手工捺染による店の紋と屋号が染め抜かれているであろうこの暖簾に、離れた林で鳴く郭公の声が届いている。昔とは客層も変わったことであろうこの店の行く末に、一抹の不安がある。

雲の峰進水式の銀の斧　矢作　水尾

焦点の絞り込まれた爽快な俳句である。大型船でなければ船台進水の方法が採られるので、船名の命名式の後、まさかり型の斧で支綱が切られ、薬玉とシャンパンが割られて新造船が進水台を滑り降り水面に入水する。瀟洒な銀色の斧と、遥か沖合に偉容を誇る入道雲が、この船の前途を祝している。

進み出て籤改めの麻衣　由良ゆら女

籤改めとは、七月十七日、京都祇園祭の山鉾巡行の順番が、籤取り式で決まった通りに運行されているかを改める儀式で、四条堺町に設けられた関所で、奉行役を務める京都市長が、漆塗の文箱に入った籤札を見定める。各山鉾の町行司が扇子を使って文箱の紐を解いたり巻き付ける雅な所作や、奉行に文箱を差し出す時と、改めが済んで退く時の潔い動作が圧巻である。梅雨明け前後の京都の蒸し暑さを一掃するような町行司の麻衣である。

郭公や音痴が紛れ込んでゐる　網野　月を

音感の鋭い人にとって、音程の外れた歌や楽器の演奏は大変聞き苦しいものかと思う。狂いようのない単調な鳴き声のように思う郭公にも、仲間から馬鹿にされるような音痴がいるのだろうか。いや、郭公の耳よりも、作者の耳の方が数倍優れているのだろう。

郭公や眠らぬ眠狂四郎　正木　萬蝶

大刀を抱えて片膝を立て、黙然と眼を閉じている眠狂四郎。銀幕のスター市川雷蔵が主役を演じた映画をよく観に行った。はてさて、まったく人を食った俳句で、どこから入り込めばよいのか見当がつかないが、すこぶる面白い。郭公を聞いているのは作者で、作者の脳裏に存在する眠狂四郎も眠ることなくその声を聞いているのである。

郭公や渡り切つたるかづら橋　森川　義子

山中深く分け入り、数丈の滝をバックに蔓草で作った古びた吊橋がある。揺れて軋む蔓橋を怖々渡る。それほど長い橋ではないが、命が縮むような一歩また一歩であったろう。渡るのに夢中で聞こえなかった郭公の鳴き声をはっきりと確認した。「よく渡れたね」と誉めてくれているようだ。

色里に隣る里坊閑古鳥　山中　順子

色里は色町のことで、一方の里坊は、山寺の僧侶が人里に構える僧坊のことである。必要上、人里に僧坊を構えるのは

よしとしても、色里に隣り合っているのはまずかろう。想像を逞しくするとなかなか興味の沸く俳句である。檀家の御布施が女狐に吸い取られぬように願いたいものだ。それにしても閑古鳥の物淋しさがぴりっと締めている。

郭公鳴く風に誘はれだるま船　　大村　節代

達磨船とは、和洋折衷型の幅の広い大型の艀（はしけ）のことで、主に砂や砂利、セメントなどを運搬する船だと思う。むかし、小学校の同級生の親が建材業を営んでいて達磨船を所有しており、その船で何度か両国の花火見物に行ったことがある。夫婦で達磨船に乗り、隅田川を上り下りして仕事をしていた情景を見たこともあった。この句のだるま船は、都会地ではなく、自然に恵まれた河川を運行しているもので、心地よい川風に吹かれ、郭公を舟歌代わりに聞きながら物資をはこんでいるのであろう。

黒南風やデモ行進の蛇行せり　　野田　静香

海外諸国のような激しさは無いが、我が国でも時たまデモ行進が行われることがある。時の政府にもの申すのが目的で、国会議事堂辺りで行われるのが多いようだが、この句の蛇行が偶然のものか、計画的なものかは判然としない。ただ、黒南風という鬱陶しさをはらんだ風から、陰湿さを感じる。

堂々と進の一文字白扇子　　柚木　治子

大振りで骨太の男用の白扇に、「進」の一文字を筆太に揮毫したのであろう。学校の教師が卒業子に与えたものか、或いは、武道か芸事の師匠が弟子に与えたものかと想像する。子弟のこれからの進路について、迷うことなく一直線に進めという訓示と見た。実に清々しい俳句である。

見沼田に郭公の声母のこゑ　　日髙　道を

都市部に属しながら偉大な自然が残されているさいたま市の「見沼」。四季の草花は勿論、昆虫類や野生の小動物、野鳥に出会える場所である。郭公の鳴き声も例外ではなかろうが、「母のこゑ」を如何に解するか。むかし作者が見沼田圃に遊んだ時の母の声の回想か、托卵した我が子を探す郭公の母鳥の声か。筆者としては後者と解釈し、夢のある一句と見做した。

膝頭抱き思案の羅漢郭公啼く　　丸山マスミ

百羅漢や五百羅漢のある寺院が各地にある。阿羅漢＝羅漢さんは、仏教修行の最高段階に達した人といわれるが、そのお姿を一つ一つ観察してゆくと、とてもそんな偉い人とは思えない。仏像とは全く違う人間そのものを感じるからで、歓

びも悲しみも悩みも、人間が持ち合わせている様々な表情を表しているからであろう。膝頭を抱いててしょんぼりと思案に暮れている羅漢さんは、新型コロナ感染禍で下請の仕事が激減し、倒産寸前の状態に追い込まれた町工場の社長の姿であり、思わず涙を誘う。寂しさが募る閑古鳥ではなく、元気を促す郭公の声である。

郭公の声にガムラン合はせたり　　松井由紀子

ガムランはインドネシア語で、インドネシア・マレーシアの器楽合奏の総称の意であることを学習した。ガムランの中に郭公の声が入り込んだのではなく、その逆であるところに、お国柄が出ていて楽しい。

進物の鯵のくさやの置きどころ　　石山かつ子

室鯵のくさやであろう。食すると実に旨いが、特有の臭いを持っており、焼くと更に強烈な臭気を発する厄介な干物である。他家へ進上するために用意した鯵のくさや。なるべく臭わない所に置こうと苦心している様子が伝わってくる。果して作者にとって好物か否か。

「あれ」「それ」で進む対話や冷素麺　　境　延昭

哀しきかな老化現象。映画俳優や歌手の名前がなかなか出てこず、代名詞の連発になるが、不思議に会話が弾み、和やかな昼食時が過ぎてゆく。会話を邪魔しない素麺が丁度よい。

郭公の声を薬味に蕎麦処　　五明　昇

作者の故郷信州は、言わずと知れた蕎麦の名産地で、名代の蕎麦処が軒を連ねているのだろう。羨ましい限りである。故郷を訪れた作者が、何時も立ち寄る名店に入り、地酒をゆっくり口に運びながら蕎麦を待つ。やがて店の奥から待ち望んでいた蕎麦が運ばれてくる。薬味をたっぷり入れ一箸二箸口に運ぶ。その至福の瞬間、裏山から郭公の声が届き、蕎麦が一段と旨味を増した。

いきなりのくちづけ郭公谺して　　山中みどり

郊外へハイキングに出かけた男女。郭公の声に気を取られていた女性の口がいきなり塞がれた。驚きと嬉しさが交差する複雑な気持。郭公の谺が至福の時間を演出している。

郭公やチャペルに響く祝婚歌　　梅澤　佐江

避暑地の定番である軽井沢の教会を想う一句である。式が滞りなく進行して、いよいよ二人の門出を祝う賛美歌が斉唱される。近くの林から、郭公が歌に負けじと精一杯声を張り上げエールを贈っている。

郭公の木霊を聴けば母恋し　西幅　公子

郭公の声は実に牧歌的で郷愁を誘う。いわんや、木霊となった郭公は尚更である。普段はそれほど思わなかった母が、何故か無性に恋しくなる。人それぞれにそんな時があるのだろう。

郭公や旅寝の窓の白みゆく　越田　栄子

旅の宿で迎える日の出は、旅行の開放感を最大にしてくれる。時計に目を走らせてからまたうとうとする幸せな時間。今日の朝を告げるように、早起き郭公が近くの森で啼いている。その声を聴いている内に、また夢の中へ還ってしまった。

文豪の鄙びし館遠郭公　山田美佐尾

某文豪が、生前執筆のために使っていた山荘を想像する。山家暮しを楽しんだ作家なのであろう。

建物は勿論、家の隅々に鄙びの情趣が染みこんでいる。観光旅行のルートの一つであろうか、文豪の旧居を見学し、多くの本を読んだファン読者の一人として、その人を偲ぶひと時であった。館の部屋の一つ一つに、登場人物が住んでいるような気がした。

進み出て名告を上ぐる蟇　原田　秀子

夕方庭に出たら大きな蟇に遭遇した。何か分からないが、少し口を開けて小さな音を漏らした。あたかも己の名を告げているように思え感激した。

信号は進めのサイン昼の雷　石井　喜恵

都会の大きな交差点。遠くの空が暗黒に染まっていて、今にも大粒の雨が襲ってきそうな気配がする。折から突如の雷鳴にびっくりしていたら、信号が青にかわっていた。

遺影に手合はす忌日の遠郭公　鈴木　康世

夫の忌日であろうか。遺影に向かって何時もより丁寧に手を合わす。ぽつりぽつり語りかけていると、遠くから郭公の声が聞こえてきた。夫からの返事のように聞こえた。

郭公や輪唱洩るる五時間目　森本　早苗

小学校か中学校の音楽の授業を想像する。郭公に関わる歌や曲は外国のものも含めていろいろあるが、輪唱となるとやはり童謡の「静かな湖畔」であろう。あの明るく楽しげな歌詞が繰り返される中に、本物の郭公が参加する最高の時間。

歳時記寄贈のお願い
「はじめての俳句教室」へのお誘い

この度、11 月 20 日㈮、21 日㈯に例年通り浦和区別所沼公園にて「はじめての俳句教室」を開催いたします。本年は例年の５月から 11 月に時期を移しての開催です。

そこで初めて俳句に接する方々のために水明の皆様に歳時記のご寄贈をお願い申し上げます。既に使用されなくなった初心のころにご使用の歳時記など、ご寄贈をお願い申し上げます。

寄贈先：水明発行所　宛

また、水明の皆様へも、もう一度、初心に返ってお勉強をしたいという方々のご受講もご案内申し上げたく存じます。「市報さいたま」への記事掲載もございます。ご活用ください。

直接に公園事務所へ申込んでも、ＨＰでの申込でも構いません。発行所へのお問い合わせでも構いません。奮ってご参加ください。

※「はじめての俳句教室」

11 月 20 日㈮、21 日㈯の両日 10：00 ～ 16：00 の開催で、受講料 ￥1,000 です。

普及推進部

水琴窟

（水明集七月号鑑賞）

池田　雅夫

むくむくと土竜若草もち上ぐる　　松島　寛久

土竜は地中にトンネルを掘って棲み、土中の虫などを食べる。土を隆起させるので農作物に害を与える。厳しい冬を堪えた草々の生命力を称えるも、その根元を脅かす土竜にも目を向ける慈しみが伝わってくる句に共感する。

ジーパンのばりばり乾く日永かな　　平石　睦子

ようやく迎えた春の日を有効に使う嬉しさが伝わってくる閉めきっていた部屋の窓を開け、心地よい風を招き入れる。天気がよいと洗濯をしたくなるようだ。「ばりばり乾く」のたたみかけるような措辞に開放感があふれている。

一年生園児の気持抜けきれず　　福田　育子

今年の四月は、コロナウイルスの影響で新学期を始められない状態であった。幼稚園の卒園式もままならず、自宅で過ごす児には心の切り替えができなかったことだろう。そんな複雑な環境と心情をみごとに詠み込んでいる。

若葉雨校門前の水溜り　　柳父　はる

初夏の木々の初初しい葉の輝きに目をうばわれる。それを雨が一層活力を与えてくれる。「校門前」であるから、水溜りを飛び越える児童の元気な姿が見えてくる。

蝶々の吹き戻さるる赤信号　　水落　守伊

「奔放な蝶の軌跡が見せる風」（稲岡　長）の句がある。蝶の軌跡は予測することが難しい。その翔び方を独想的に詠んでいる。偶然に赤信号に変わった瞬間を見逃さない観察力がすばらしい。日常の中の小さな出来事が俳句になる。

囀に引き込まれ行く森の中　　南條きわゑ

春の野山や森でさまざまな鳥が鳴き交わす光景は、人を魅了して別世界へと誘うようでもある。美しい鳴き声に一目姿を見たいと森の中へ引き込まれていってしまう。山雀の仲間か四十雀の仲間か、囀の臨場感あふれる句に感動した。

川下へ余韻つたふる花筏　　武田　重子

桜は咲いているときはもとより、散るときも花屑となっても称賛される。「花筏」は水面に浮かぶたくさんの桜の花びらが、くっつき離れながらゆっくりと流れてゆくもの。まさに「余韻嫋嫋（じょうじょう）」の境地であろう。

分校に教師ひとりや濃山吹　飯室　夏江

古く万葉にも詠われている山吹。荒れた村の分校に転任して来た教師なのだろう。学童、そして教師にとっても新しい境遇での期待と不安が交錯する心境が多様に推察できる。「切れ」の効果を生かしたみごとな取り合わせに共感する。

春雷や慈雨待ちあぐむ山の木々　仲田　利子

「慈雨」は「恵みの雨」ともいう。ほどよく降り、木や草を育てるのである。「春雷」は夏の雷とちがって、豪雨などの被害が少なく、二度三度鳴ってそれっきりであることも。「待ちあぐむ」に、人も望んでいることが表われている。

春の月人気タレント急逝す　髙橋満耶子

「人気タレント」とは、あの「志村けん」さんにちがいない。新型コロナウイルスの犠牲となったことは国中の悲しみである。そして、その恐ろしさをありありと教訓としたことが強く心に残っている。「春の月」は故人を悼んでいる。

花吹雪兄につきゆくランドセル　葛城千世子

かわいらしい句に思わず頷いてしまった。兄弟仲よく登校する姿が見える。一年生になったばかりの弟はただ兄のあとについてゆく。兄の仕草一つ一つが指針となっているのだ。

休校の雲梯に散る桜蘂　本橋　稀香

新型コロナウイルスの影響で新学期が始まらない。誰もいない学校では桜の花の時期を過ぎ、桜蘂を散らす頃となった。校庭の隅の鉄棒や雲梯が寂しそうに風に吹かれている。卒業、入学の時期を経た時間の経過がみごとに表現されている。

引鶴の眼に湖の反射光　横山　礼子

「引鶴」は越冬した鶴が三月ごろ再び北へ帰ること。真名鶴、鍋鶴は鹿児島県や山口県などで見られる。飛び立った鶴は、それまで棲んでいた湖を惜しむように旋回してから去ってゆくという。大自然の鳥瞰の景がありありと見える。

全天を覆ふがごとく桜満つ　菅原　真理

桜は花の盛りもさることながら、その散りぎわも愛されてきた。花吹雪、落花などの句も多く詠まれてきた。が五分咲き、七分咲きなどの句が少ないことに気づいた。桜といえば即「満開」の印象が強い。「桜満つ」に新鮮さを感じた。

板干しの紙に揚羽の影縺る　藤間　友二

埼玉県小川町は「和紙の里」として有名である。漉き終った紙を板に貼りつけて干かす。一枚一枚干されている光景はのどかな原風景に思える。そこに揚羽蝶の色が映える。

鼓笛集

山中 順子 選

古希過ぎても群るれば少女夏椿
百日紅たつぷり揺れて空揺らす
婚約に頬染むる姉合歓の花

停電の闇大立ち回り稲光
ひきこもりにも飽きし大日女（おおひめ）秋暑し
赤とんぼ母追ふやうに追ふてみる

白牡丹渦巻くいのちたそがるる
白牡丹白を捧げて仏に持す
白牡丹雨に打たるる夜の窓

炎天やワインセラーに眠る瓶
水滴のグラスに映る葡萄園
涼風やデッキランチに赤ワイン

菅原　真理

君あれば庭の山百合笑まふ頃
山村を仙境にして瑠璃の声
来し方の句集供へて苧殻焚く

ショパンの雨だれ洋館のででむし
天道虫わが青春のホバリング
夏川のうねりはやがて日本海

杉浦　理恵

銀漢や地球の裏へエアメール
鎮守より「大利根月夜」村芝居
門前で蒲焼喰らふ残暑かな

天道虫水玉模様の吾子の服
天道虫乗り込んでくる村のバス
何時迄も手を振る母や青田道

神田　治江

姉のあとをへこ帯ゆらし浴衣の子
鉄橋下ほのかに紅き合歓の花
大文字ひと火ひと火の輝きて

越田　栄子

諏訪サヨ子

渋谷きいち

染谷　正信

笹本　啓子

鈴木　玲子

向日葵の百万本の町に住む
向日葵の濃き叫び声今落暉
鳳仙花はじけし先に兵の墓

佐々木典子

獺の如打ちしごきぶり並べけり
逃げる人生隅が好きなり油虫
嫌はれる理不尽語らず油虫

瀬戸雄二郎

突然の抱擁白きワンピース
コロナ禍に自然災害日本夏
初々しき才能葉月棋士二冠

関谷多美子

息止めて幸せ色の夕虹を
街の灯や願ひ中ばの流れ星
置きどころ忘れかけたる秋扇

塩野　久子

緋のカンナ命のかぎり陽を生くる
媼にも迫力呉るる緋のカンナ
降りて見たき小さき駅や野路の秋

鈴木　和子

カーテンも毛布も乾く炎暑かな
葛蔓のおしよせてくる墓の道
カーテンのわづかに揺れる秋立つ日

榊原　聰子

独り居も男の矜恃梅雨嵐
紫陽花や朝の勤行烟る寺
残暑見舞ひ郷の母より笑み便り

佐藤　克之

鼓笛集巻頭（八・九月号）

私の好きな一句（自句自解）　　西幅　公子

ぐらつぐらつと昇る太陽夏の山

長野県では、中学二年生になると高山へ集団登山をしている。私も中央アルプスの駒ケ岳へ登った。三千メートル級の山は初めてだった。住んでる町から歩いて登った。

翌朝、うす暗い頂上で御来光を待った。良く晴れて雲一つ無い。東の空が明くなり、光が射すとオレンジ色の盥のような太陽が、ぐらっぐらっと昇って来た。見たこともない太陽だ。驚いた。今でもはっきり覚えている。

その後多くの山で御来光を見ているが、あれ程の体験はない。

この句は、水明へ入会させて頂いた年に作ったもので、思い出深い句となった。

鼓笛集作品評

山中　順子

古希過ぎても群るれば少女夏椿
百日紅たつぷり揺れて空揺らす　　菅原　真理

女性は少女から古希まで変るが、同窓会とか集まると単純に少女に戻る。そして一群が一かたまりになって姦しく語り合う様は私も経験している。終ってからの充足感は堪えられない。百日紅の幹をさするとゆさゆさと樹をゆさぶる仕種も少女に通じる何かがある。遠い少女時代に想いがかえる。

大日女はひきこまり飽き秋暑し
ひきこもりにも飽きし大日女秋暑し＝添削　　杉浦　理恵

赤とんぼ母追うやうに追うてみる

大日女は貴人の長女の敬称（大姫君）といわれているが、この字を使うと身近な関係が納得させられる。この作者の感覚が読めたとき安心出来る。

赤とんぼの句はひきこもっていた娘が母を追って出て来てくれた安堵感。追うてみるに気も晴れたであろう。

白牡丹の三句について　　神田　治江

白牡丹の三句に漂う怪しさが、じめつかなく伝わってくる〝白牡丹雨に打たるる夜の窓〟は一寸恐い。花には精が宿るという。

最近の名句集を探る
齋藤愼爾　坂本宮尾　守屋明俊　筑紫磐井（司会）
●座談会
三島広志『天職』
辻美奈子『天空の鏡』
北大路翼『見えない傷』

追悼　後藤比奈夫
人と作品
仲村青彦『夏の眸』

劇団「民藝」の仲間
吉行和子／富田敏子
黒田杏子／内田美紗

●今月の華
稲田眸子／毬矢まりえ

●俳句と短歌の10作競詠
髙田正子＋藤島秀憲

●巻頭三句
小檜山繁子／田島和生
加藤耕子／山本比呂也
水内慶太／山川幸子

●その時、俳句手帳
朝妻　力

●好評連載
南　伸坊》猫の俳句
筑紫磐井》俳壇観測
坂口昌弘》忘れ得ぬ俳人と秀句
青木亮人》句の手触り、俳人の響き
大西　朋》俳句へのまなざし
神作研一》手のひらの江戸——古典籍を旅する
藤村公洋》俳句のつまみ
二ノ宮一雄》一望百里

俳句四季
Haiku Shiki
2020年10月号
9月20日発売
定価1000円（税込）
http://www.tokyoshiki.co.jp/　東京四季出版
〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

句集喝采

近藤　徹平

◆柴田南海子「朝ざくら夕ざくら」　東京四季出版

著者略歴　昭和十五年兵庫県明石市生。昭和四十八年「さいかち」入会、平成二十八年「太陽」主宰継承。句集「天上薫風」他三句集既刊。俳人協会会員。現住所広島県三原市。

坂口昌弘氏は帯で「作者は桜に包まれた寺に住み……桜の精・花神に充ちたこの世の寂光土の中で十七音のポエジーを希求」と紹介する。句をポエジーとした点に興味が湧く。

詩乞ひの目を朝ざくら夕ざくら

湖心まで詩心飛ばせ青嵐

冬木立は詩林私の思索径

詩情、ポエジーを挑戦的に追及する句作に感銘した。第一句は花に囲まれた生活の中の詩乞いで、本句集の表題句。第二句は湖心と青嵐だけの単純な景の中に詩情を追及する句。第三句は、冬木立の中で著者が詩情に浸る景を詠んでいる。

チゴイネルワイゼン青蔦噴く出窓

秋夕焼鴉もわれもホメロスに

懺悔室ステンドグラスを漉す冬日

著者は我が国の風土からはみ出しそうな句も大いに詠む。第一句、青蔦の覆う洋館で異民族の華麗なバイオリン曲を聴いて詩情を滾らせる。第二句、古代ギリシャの吟遊詩人に時空を超えて親近感を抱いている。第三句、寺に住む著者は、異教徒の教会の日常にも詩情の輪を広げていると拝察した。

◆龍野　龍「雪つぶて」　文學の森

著者略歴　昭和二十八年埼玉県旧大利根町生。昭和五十二年「浮野」入会、落合水尾に師事、昭和五十九年句集「手足」刊、「浮野」落合水尾主宰による本書の帯文には、龍俳句の魅力は、「内実の微妙の確かなる把握と簡朴にして清澄なリリシズムの徹底にあるを貫いている」と書かれている。俳人協会会員。

一木を打つて芯立つ雪つぶて

動かざることに徹して墓碑灼くる

抜かれたる釘に熱あり春の雪

第一句は句集の表題句である。雪礫を木に打ちつけたら、どんなときに芯が立つのか。雪温の高い湿雪は溶けて芯にならない。雪温の低い粉雪は固まらないので雪礫にならない。この摂理を説明したら俳句ではない。落合主宰は「過不足のない感動の表出は絶妙」と絶讃する。第二句、筆者は今夏の迎盆で墓参した際、黒御影の墓碑は灼けて火傷する程熱かった。第三句、堅牢な古木に打ち込まれた釘は抜くのに大変手間取るが、その釘が熱を持つことを筆者も体験している。

講義今いよいよ明治雪催

著者は平成二十六年中学校長を最後に退職された。筆者の歴史受講は時間不足で、江戸時代で終わった。この句の季語が雪催だが、明治をどのように講義されたのか興味がある。

水明例会

第一例会（浦和）

茂木境　和子延昭　報

おほつぴらに嬰のちんぽこ天花粉　延昭
夕風にふはり乗り行く天瓜粉　マスミ
人面に見ゆる妖花や梅雨深し　治子
湯上りの子等は裸族や天瓜粉　稀香
久久の浴衣姿は面映ゆし　理恵
面相筆で描く目元や夜の秋　節代
真面の鼻梁翳なす薪能　由紀子
はしやぐ児をましゆまろにする汗しらず　〃
――以上特選
面構へだけで世過ぎの蟇　由紀子
こそばゆき首の後れ毛天瓜粉　愛子
夏祭り強面てきや愛想よし　理恵
湯上がりのをみなゆるゆる天花粉　節代
あざやかに面を一本青嵐　大場順子
朝刊の一面ざつと梅雨曇　和葉
夕顔やうすむらさきの空一面　治子
風呂上りの身にそつと置く天瓜粉　チアキ
白面では云へぬひと言罌粟の花　延昭
子育ても楽しと思ふ天瓜粉　喜恵
面倒な話は嫌ひ心太　稀香
面前を遮るドアや梅雨の朝　徹平
湯帰りの女のうなじ天瓜粉　マスミ
小面の粗彫いつか吾娘の顔　光弥
実桜や得意満面吾子立てり　和子

八月分

朝顔の紺を誉めゆく師匠かな　和葉
昇りつめ女子寮のぞく牽牛花　〃
朝顔の赤白紫紺そろふ庭　チアキ
朝顔の目隠しゆかし谷中路地　マスミ
我が道の穴ぼこ照らす盆の月　理恵
アルバムは亡き人ばかり牽牛花　節代
モンローウォークしたき朝顔飾る道　理恵
――以上特選
母を待つ朝顔の裏保健室　稀香
朝顔の上に咲き継ぐ向上心　光子
穴蔵にバガボンの本夕ひぐらし　節代
取り締まる法に抜け穴女郎蜘蛛　延昭
朝顔や乳児の名訊く垣根越し　徹平
快復の試歩に朝顔求めけり　由紀子
朝顔の垣より覗く青が好き　はるみ
この穴場誰にも秘密香魚釣り　マスミ
朝顔や明けの冷気に紺ほどく　大場順子
朝顔に濃淡しるきすみれ色　喜恵
弟子が師にさがす朝顔銘あれば　光弥
朝顔や落語に生きる江戸の声　治子
大穴を逃し馬券をちぎる朱夏　和葉
安寧をかもす大輪牽牛花　チアキ
朝顔の未だ濡れてゐる通学路　和子

第二例会（東京本所）

山中みどり　太田絹映　報

読みさしの「老人と海」梅雨明ける　昌弘
陽に透かす桧扇貝や梅雨明ける　〃
路地多き町に香のあり走り梅雨　玲子
梅雨上る潮の匂ひの清洲橋　みどり
――以上特選
おにぎりが旨いと叫ぶ梅雨の明　登志子

梅雨明を待ち兼ね軽きペダル漕ぐ　敏江
鰻屋のうの字の長き夏暖簾　竺仙
コロナ禍の鬱の最中や梅雨明くる　峰雄
両国路ゆかた力士の髷匂ふ　禮子
木の匂ひ風の匂ひや梅雨の明　鶴城
せせらぎはボルカのリズム梅雨明けぬ　淑江
少年の貝の標本梅雨明ける　昌弘
アポロンと言ふ名の紅茶梅雨籠り　玲子
青シャツに貝の釦や梅雨の明　みどり

八月分

夜の秋や庭木に寄りて一呼吸　登志子
筒抜けの噂話や夜の秋　〃
瑠璃色の硝子のチロリ夜の秋　みどり

——以上特選

落雷の天と地繋ぐスカイツリー　峰雄
バス待てば言葉少なく夜の秋　淑江
一日のつらつら記す夜の秋　敏江
夜の秋窓の明りで目をさまし　寿恵
頸白き博多人形夜の秋　昌弘
友よりの思はぬ知らせ夜の秋　鶴城
ラムネ玉かちり昭和の響き飲む　竺仙
着流しに白の角帯夜の秋　みどり
自転車の旅の話や夜の秋　玲子
信楽(しがらき)碗に憩ふ一服夜の秋　絹映

第三例会（東京）

五明　昇
曲淵　報
徹雄

夏山や一刀彫の立ち姿　大場順子
四つに組む闘牛の角夏嶺燃ゆ　〃
夏山に入りてときめく汽車の窓　由美
息切れの少し艶めく夏山路　萬蝶
でで虫の矜持の角の長さかな　〃

——以上特選

軒に来て軒を離れぬ梅雨の蝶　清
夏の山大樹に水の音を聴く　岡野順子
青嶺暮れ一番星のひかり出す　康世
夏山の頂に来て星拾ふ　喜久
僧兵の末裔もゐて夏の比良　萬蝶
大青嶺いきいきと雲湧き上がる　大場順子
万緑や牛久観音濡れて立つ　祥絵
飯盒のおこげにカレー夏の山　理恵
大樹剪り眺望戻る青嶺かな　由美
雲海の底にうごめく人の波　雅夫
風青し石仏の手に石の蓮　徹雄
機嫌よき蔵王の空よさくらんぼ　昇

八月分

踏切のきんこんかんも晩夏かな　岡野順子
籐椅子に目覚めし部屋の小暗がり　祥絵
一雨に森の量感夏深し　〃
曇天を押し上ぐるかに蓮の花　由美
誘惑もときめきもなく晩夏　理恵
空蟬を握りつぶして恋終ふ　萬蝶
落日に繋る出船や佐渡晩夏　昇

渚に拾ふますほの貝や晩夏光　清
糠床に少し塩足す晩夏かな　大場順子
晩夏かな杖の一歩を慎重に　清
遠き眼で少女海見る晩夏かな　岡野順子
「瓢箪池」を繕き偲ぶ晩夏かな　理恵
植込みの地の窪占めて青大将　康世
初初し棋聖伏し目に夏袴　祥絵
山からの風や晩夏の茶屋煙　喜久
人気なき晩夏の池の舫ひ船　雅夫
破倫なる想ひを糧とせし晩夏　由美
銅葺きの屋根ぬめぬめと夏の雨　萬蝶
とびきりの風の一陣山晩夏　徹雄
　　昇

——以上特選

第四例会（浦和）

境　延昭
石井　喜恵
報

傷心のハートのかけら熱帯魚　暦文
流木は骨片となり旱川　恵子
旱天に験あらたかな寺廟　昇
グッピーの心療内科待合室　延昭
大旱雨待ち顔の風見鶏　光子
空蟬と光源氏か熱帯魚　翔太
息ひそめ旱天に佇つ老大樹　マスミ
旱天に錆をこぼして引込線　喜恵
ボクサーの眉間に刺さる旱かな　暦文

天使魚の綺羅の虜となる夕べ　玲子
熱帯魚の前で踊り子一休み　恵子
いつ見ても横顔ばかり天使魚　順子
大旱磨崖仏さへ罅割れむ　でん治
水位標の踵を晒す旱川　昇
旱天や護謨の合羽に罅はしる　延昭
水槽に別世界あり熱帯魚　光子
熱帯魚見詰むる猫の好奇心　修
大旱や口元厳し仁王像　寛治
ダム底に靴の跡形大旱　翔太
ぎざぎざと罅割れ走る旱畑　マスミ
天使魚にも媚びる奴ゐて医薬外　光弥
あいまいな約束重し旱坂　喜恵

八月分

剥がれさうな手配の顔に大西日　暦文
闘声のひそむ城址や大西日　玲子
磯笛に西日一閃稽古海女　順子
大西日淀む自転車置場かな　でん治
焼岳に火を放ちたる大西日　昇
病室の西日気遣ふ白衣かな　翔太
冷麦に遊び心や彩の麺　光弥
サンプルのパスタに西日洋食屋　喜恵

——以上特選

冷麦の紅が和ます三回忌　暦文
坂東太郎西日に染まり昏れなづむ　玲子
水玉の服に生る泡冷し麦　恵子
あとずさり出来ぬポストや大西日　順子
エルメスの騎士像凜と西日なか　でん治
西日呑み影絵となりし佐渡島　昇
江ノ電の窓より西日真正面　延昭
文机の書を片隅に冷し麦　光子
真白なる冷麦瑠璃に渦を巻く　修
露座仏の逃げだす気配西日の矢　寛治
大西日琵琶湖一望安土山　翔太
冷麦に馴染む杉箸里住まひ　マスミ
冷麦嚥(の)む鳥かも知れぬ人の祖は　光弥
膝小僧のぞくジーンズ西日中　喜恵

第五例会（浦和）

梅澤　佐江
河野はるみ　報

地球儀の球体の張り朝焼けす　水尾
朝焼にたちまち染むる千枚田　義子
朝焼や西は夜陰を抜けきれず　はるみ
朝やけや潮目境に魚跳ねて　玲子
蜜豆や銀座路地裏黄昏るる　佐江
蜜豆の匙より動く二枚舌　〃

——以上特選

雲海も遠嶺も染めて朝焼す　水尾
朝焼やパステルカラーに染りゆく　美佐尾
朝焼の光の中に牧の牛　義子
月曜の脳は忙し蜜豆食ぶ　はるみ
蜜豆や窓に潮騒引きよせて　玲子
朝焼に染まりし雲はトロピカル　理恵
朝焼や意気揚揚の大漁旗　佐江

八月分

半島の暮色そびらに赤蜻蛉　水尾
朱の襷跳ねて鈴振るねぶたかな　美佐尾
草撓ふ重さをもてり秋茜　義子
なほさらに故里遠くねぶたの灯　はるみ
海上ねぶた黄泉へ狂喜を還し行く　理恵
廃校のゴールポストに赤蜻蛉　〃
入相の水の華やぎ赤蜻蛉　佐江

——以上特選

夕茜空を分け合ふ赤蜻蛉　水尾
宿場町遊女の墓の赤とんぼ　美佐尾
万人のねぶた祭の息吹かな　義子
寺町の鐘は打てぬか赤とんぼ　はるみ
惚れたのか乙女の髪に赤蜻蛉　理恵
荒武者の眼光赫つと佞武多かな　玲子
一太刀を浴びせる気配武者佞武多　佐江

関西例会（大阪）

森本　早苗　報

万緑や大観覧車顔出しぬ　敦子
転寝に肩をこらして半夏雨　ゆら女
進む老いを居直る夏の朝寝かな　洋子
ぷーらぁんと小便小僧ほどのゴーヤ　智恵子
夏霧の流る港や灯のあはき　玲子

噴水や養生芝生に鳩遊ぶ　早苗
郭公やときに郷愁過りしも　礼子
梅雨嵐うねりと共に進航す　千津子
ゴム長の我を侮る梅雨鴉　和子
がら空きの循環バス来る日の盛り　道子
生家へとどの道行けど閑古鳥　千枝子
びしよ濡れも遊びのひとつ夏嵐　千世子
郭公や水やる石の父に見ゆ　きわゑ

婦人句会（浦和）

松本　光子　報

髪切つて青水無月の風通す　貴美子
こそばゆき首の後れ毛菖蒲園　〃
光琳の水輪欲しがる花菖蒲　さく子
水無月の森が放さぬ彫塑館　〃
こんもりと水無月の色森におく　光子
ととのへば淋しき影も白菖蒲　由紀子
水無月やバルサミコ酢を食卓に　ひさの

――以上特選

水無月や向かうに深き空があり　愛子
沼眠る青水無月の月のかほ　由紀子
色濃きは思ひの深き花菖蒲　さく子
水無月の一歩一歩を歩道橋　順子
花菖蒲風に仕ふる容して　貴美子
巫女と会ふゆつくりめでる花菖蒲　ひさの
名君の一声堀切菖蒲園　光子

若松句会（京橋）

菊池ひろこ
石田　慶子　報

地球から溢れ出てゐる夏の海　萬蝶
幾度の転生またもなめくぢり　〃
夏の浜大胆に掘る「愛」の文字　倭子
夏の海逢魔が刻の波の音　〃
紺碧の夏の海原より帆影　佐江
夏の海バイクの二人日の出待つ　慶子
夏の海ずーつと向かうに冬の海　月を
夏の海十億年のうねりかな　俊晴

――以上特選

夏の海父の力作砂の城　慶子
夏の海日本丸よ帆をあげよ　千春
高校野球の歓声を待つ青き空　知子
海賊船島を巡るや夏の海　はるみ
夏濤に父と云ふ名の人想ふ　理恵
えいえいと遠泳の子ら声合はせ　俊晴
気懸りはなべてリセット夏の海　鶴城
夏の海ことしの彼の左利き　萬蝶
少年の眼差しの先夏怒涛　佐江
夏の海忘れかけてた塩辛さ　月を
自粛解け少年曝す夏の海　倭子
幼子の足裏に温し夏の海　ひろこ

八月分

抜き襟を此見よがしに踊の輪　月を
踊唄替はる間に抜けませう　佐江
盆踊互ひに老いて行き違ふ　倭子
鈴ヶ森地の底からの踊唄　萬蝶
角帯の背中追ひかけ盆踊　慶子
輪の外も揺るる踊の下がり足　ひろこ

――以上特選

踊の輪貴方とならと連れ立ちて　月を
恥ぢらひし十九の娘藍浴衣　知子
踊り果て踊り疲れの下駄を擦る　倭子
雑草は総出で刈りて踊櫓　慶子
両国や終の住みかで遠花火　倭子
下駄鳴らす郡上踊の旅一夜　佐江
転生の夫と出逢ひし盆踊　萬蝶
出はじめは炭坑節よ盆踊　はるみ
盆踊の輪の中にゐてひとりぼつち　千春
産土の山に抱かれ盆踊　理恵
盆踊母によく似た手の捌き　俊晴
踊の輪幼馴染に会ひたくて　鶴城
海側で踊見てゐる別荘族　ひろこ

☆　☆

各地句会

水明松本句会（松本）

外猫に自餌器を据ゑて夏の旅　恒子
白玉やふと思ひ出す母の顔　陽子
最悪さどこにも行けない夏休み　マリス
梅雨空とスカイブルーのにらめつこ　玲子
江戸切子きらきらきらと星涼し　寿子

和歌山水明俳句会（和歌山）

歳時記を開きしままに盆用意　千枝子
どこにも行けず宿題も無き夏休み　千世子
夏の城ミストの術の忍者かな　満耶子
秋の川ミーティングする鯉の群れ　きわゑ
這ひはひを追ひかけおくる団扇風　洋子
事切るる蝉の目ン玉ひと揺れす　廸代

櫟の会（浦和）

飛びたくて助走何度も羽抜鶏　朋子
早立ちの客起こしをり羽抜鳥　富子
露台より夜の札幌きらめけり　彰二
羽抜鶏姿気にせず餌をつつく　千重子
バルコニー一番星が西空に　裕之
一陣の風によろける羽抜鳥　克之
時告ぐる一瞬胸張る羽抜鶏　治子

青葉の会（浦和）

黒塀に咲く夕顔に誘はれ　真理
友の家の夕顔の花道しるべ　美智枝
晩鐘や庭の夕顔感賞す　啓子
蜜豆を我が人生の傍らに　公子
夕顔に孫の向かへを急ぎ足　洋子
夕顔を一輪母に腕白子　和子
大正ロマンかもす器に蜜豆を　輝翠

八月分

水牛の角の花瓶に桔梗活け　美紗子
残暑なり角つき合はす家ごもり　真理
提灯の迎火守り角曲がる　美智枝
落鮎の迷ひ込みたる三角洲　啓子
突如閃光地割れのやうな秋の雷　公子
孫に教へる三角にぎり秋の昼　洋子
掻き分けて茗荷の花の薄明り　和子
あの角のかき氷屋の列ぐるり　輝翠

山茶花（浦和）

野良着脱ぎ夕顔の白定まりぬ　マスミ
門扉のみ残る更地の炎暑かな　泰子
海外の息子待つ身の炎暑かな　清一
炎暑にも髪なびかせてチャリの行く　しず子
あでやかに咲けど夕顔淋しけれ　美江子
交替を告げて夕顔しぼみけり　光子
夕闇に開く夕顔なまめかし　綾子

八月分

行く雲に白き輝き今朝の秋　マスミ
過去帳に知らぬ名のあり大南瓜　泰子
秋立つやセリコで走る頬の風　美江子
板の間に大の字に寝て今朝の秋　光子
秋立つや川瀬に雲も流れゆく　しず子
今朝の秋ジュース身にしむラジオ体操　清一
生き生きてうだり受けたり炎暑かな　嶺一
大南瓜眺めて触れて店に入る　綾子

皐月の会（浦和）

俯きし少女したたか鹿の子百合　静香
池畔より蝶を誘ふ寄席太鼓　孝麿
夏落葉クラブの部長引退す　久子
事故の現場に百合の花束枯れ果てて　暦文
夕焼けて釣竿重く父帰る　きいち

八月分

ふくよかな女将のお辞儀桃熟るる　静香
八月の峠の茶屋にハーモニカ　久子
仏壇にふえし写真と桃のかず　暦文
八月や錆びたバイクに油さす　きいち

光が丘俳句教室（東京）

蛍火や石ころ一つ瞽女の墓　守伊
ほたる狩母の掌しつかと握りをり　はる
百日紅ころころ笑ふ乙女達　康子
蛍見る子らのいつしか静かなり　史子
森と言ふポストへ返す落し文　竜也
我を呼ぶ父の声する蛍の夜　理恵

蝌蚪の会（浦和）

黙黙と朝粥を食む安居かな　宣子
夏木立光合成を嗅いでみる　礼子
夏安居や墨の香残る文机　るみ子
対話するロスコルームや夏木立　さち子
群立の高層ビルは夏木立　元美
精進もせなで在家の安居かな　月を
大木の上に夢あり蝸牛　鶴城

八月分

仲秋や能装束の衣の音　るみ子
新涼や素肌にしみる化粧水　元美
新涼や会ひたき人に会へぬまま　礼子
法螺貝の響く僧列涼新た　宣子
秋の蝶時間の中を飛び回る　さち子
置き去りの官能小説居待月　鶴城
放屁虫確信犯且つ知能犯　月を

櫻蔭句会（浦和）

片かげりの切れ目をぱんと白き傘　由紀子
片蔭に縁どられたる昼の街　真理
片蔭の風もベンチも木の香り　茂子
若狭瓜割清水あふれてする飛泉　美智枝
パーマ屋の約束の時片かげり　幸代
白神の天より蒼き湧き清水　多美子
一滴が源流となる山清水　公子
業平に縁の神社清水湧く　美紗子
片蔭を水面にこぼす舫ひ舟　マスミ

鶴川山百合句会（鶴川）

晩節は種も仕掛も明易し　廉三
大正の浪漫懐かし月見草　雄二郎
右利きの夫婦でありぬカタツムリ　月を
泣き虫にでで虫角出し頭出し　喜久
青み帯ぶ青年の幹蝸牛　史代
授乳する青白き胸明易し　広子
蝸牛一筆書きでI LOVE YOU　知子
蝸牛レタスの中に紛れ込み　由美子
光の帯残し葉隠れかたつむり　千春
晴れの日に出会ふでで虫左巻き　萬蝶
明易の手押しポンプのきしむ音　理恵
背伸びして沓脱石のかたつむり　玲子

八月分

能弁な背中を見せて浴衣の娘　廉三
粧ひてママご出勤合歓の花　雄二郎
合歓の花鳥海山系水甘し　月を
合歓の花子等慈しみつつ逝けり　史代
花柄で若やぐ妻の宿浴衣　広子
藍浴衣半幅帯も母のもの　知子
飛び跳ねしポケモン浴衣園の庭　由美子
抜襟の加減悩まし藍浴衣　千春
初心なのよ浴衣に隠す鉄火肌　萬蝶
退屈な午後の講義や合歓の花　理恵
蝶結びのへこ帯ゆれて浴衣の子　玲子

きざきサークル（浦和）

ハンモック熟寝の嬰の片ゑくぼ　啓子
葉のきしみ風の音聞きハンモック　かつ子
ハンモック赤子の笑窪よく動く　倶子
放送塔転た寝そがれハンモック　タイ
ハンモック木蔭でゆらり夢心地　和枝
森の気配ハンモック揺れ柱の間　喜代子

ハンモック鳥語すぐそこぱぴぷぺぽ　和子

珊瑚の会（浦和）

もしか夜店に白雪姫の毒りんご　恵子
講談本叩かれ積まれ夜店の灯　光子
御人好しの夜店の親爺どか弁食ふ　史代
夜店の灯少し離れて占師　和子
新入りは街の外れに張る夜店　広子
箱釣の隣で釣るはさくらかも　和葉
夜店にて夜目にも光る紐を買ひ　かつ子
参道のソースの匂ひ夜店の灯　喜恵
焼そば焼く夜店の父の活き活きと　マスミ
着流しの往時と出合ふ夜店かな　水尾
ふるさとが香る夜店の杏飴　昇
一等二等当り見よがし夜店の灯　節代

八月分

星月夜現場主任の青写真　光子
住み古りしわが町の川星月夜　史代
乱るるも素地に弾くる鳳仙花　和子
ほうせん花空缶溜る勝手口　広子
竹垣の道は砂地よ星月夜　和葉
摑めさうなおなんど色の星月夜　かつ子
星月夜ドクターヘリが飛び立てり　喜恵
山峡に灯の二つ三つ星月夜　マスミ
地球儀のしづかに廻る星月夜　水尾
鍵かけぬ峡の一村星月夜　昇
星月夜ブルース流るる裏のカフェ　恵子
船小屋に竹馬の友と星月夜　節代

花衣の会（浦和）

竹落葉進入止める石ひとつ　みよ
追伸に会ひたしとあり半夏生　京子
半夏生咲くこの径は母と来し　みち
日盛にまつすぐ進む鼓笛隊　峯雄
遠雷に静かに止まる観覧車　治
朝雲や登山電車が進み行く　章嘉

八月分

ゲーム器が奪ふままごと赤まんま　みよ
火葬場へ向かふ道々蓼の花　京子
木槿垣ギターつまびく音漏るる　みち
涼新た君と歩幅の揃ふなり　峯雄
田舎家の昭和の名残り木槿垣　治
白むくげ一日の命誇らしく　章嘉

たかんな俳句会（川口）

夏座敷母の居りしを偲ぶなり　勢津子
大輪棚の涼やかな鉢夏座敷　鈴木和子
祖父の世の陛下の写真夏座敷　義子
遠雷に木々が揺れだす御苑かな　妃実子
香の香と賑はひ残る夏座敷　鶴城
夏座敷栄枯盛衰二条城　真知子
一湾を一足とびにはたた神　水尾
襖絵の波裏返る夏座敷　静香

八月分

輪踊に匂ひたつ友宵あかり　福美
幼子の駆け出しゆくや踊の輪　律子
桐一葉近き八十路の麗しき　勢津子
兜太愛せし秩父音頭を総踊　鈴木和子
裏方も更けて輪に入る踊かな　義子
桐一葉雨の雫が流れ落ち　妃実子
「終活」の言葉の重み桐一葉　鶴城
兄嫁が踊化粧で日暮れ待つ　真知子
大漁旗立てて夜通し踊の輪　水尾
桐一葉明日は離るる蔵の街　静香

円卓の会（浦和）

化粧する鏡の中の夏灯　道を
鯵刺や時に鋭き十五歳　静香
潮騒はわだつみの声夏灯　翔太
夏の灯を三つ五つと峡の宿　月を
鯵刺や特攻兵のをさな顔　鶴城

八月分

乱れ萩廃村一つ埋めにけり　道を
こぼれ萩踏みしめ行きぬ式部像　翔太
塩竈の火を焚く男鰯雲　輝翠

戦へず疵つく球児夏の果　静香
じゃんけんは鰯雲までグリコのコ　月を
死に下手の父の日記やこぼれ萩　鶴城

コクーンシティカルチャー俳句教室（さいたま新都心）

大蚯蚓家に吉事のある予感　延昭
渓流に鉤と絡まる蚯蚓かな　淑子
河童ゐる伝への沼や蛇苺　正信
張り替へて浅間の風の網戸越し　美枝子
南溟より帰らざる父土用波　倶子
ままごとのママが大好き蛇苺　俊晴
巡拝を終へて皿鉢の初がつを　昇

八月分

唇厚き島の乙女や花カンナ　延昭
炎天を焼き立てピザのバイク来る　俊晴
命綱むすび鳶職炎天下　正信
炎天下のつぺらぼうとなり戻る　倶子
ハワイアンゆらゆら舞ふは海月かな　淑子
炎天下ロダンの像の考へる　美枝子
夏深し爺の繕ふ四つ目垣　昇

大宮読売俳句教室（大宮）

静寂を破るチェンソー夏木立　翔太
山奥の茶屋の品書冷奴　利子
運ばれ来サイドメニューの冷奴　治子
見上ぐれば葉裏は淡し夏木立　徹雄
夏木立ターザン羨し八十路かな　弘夫
もう一品足すに重宝冷奴　紀子
ふたかかへほどの鳥居や夏木立　正信
冷奴まづは亭主の水自慢　寛治
喇叭待つ下町の路地冷奴　サヨ子
首筋を拭ひつつ来て冷奴　君夫
冷奴ひんやり香る薬味よし　典子
堂々と脇役揃へ冷奴　卓郎
ボーイスカウトすつぽり容るる夏木立　順子

芙蓉句会（浦和）

娘ら集ひ卒寿の宴や白日傘　正子
水色の日傘を翳し会ひに行く　道子
赤錆し栄華の鉄路草茂る　税子
先立たれ律義に老いて茶の日傘　仁
川岸の栄えし宿も梅雨出水　美子

野ばらの会（浦和）

進み出て名乗りを上げし蟇　秀子
進級の子等の目笑むる風五月　治江
最終便進入灯は夏の星　夏江
合はせても進む時計や合歓の花　栄子
荻野吟子の医術の進歩雲の峰　茂子
夏帽子前へ前へと漸進す　和子
桑の実や進入禁止に守られし　みき子

八月分

秋野行く風に抜け道通ひ道　栄子
こころ乱るカンナの萎えを背にしては　治江
相続はまだ片付かずカンナ萌ゆ　茂子
降りて見る小さき駅や野路の秋　和子
コロナ禍に雄雄しく咲けるカンナかな　秀子
秋の野やレンタサイクルゆるり行く　夏江
かくれんぼ人気のカンナに動く影　みき子

芽吹句会（浦和）

鬨の声ひそむ城址や未草　玲子
漕ぎ出さば花睡蓮の暗き水　ひろこ
渡り廊下の陰で半睡ひつじ草　富子
一降りにいよよ真白きひつじ草　千重子
梅雨湿り圧せば応ふる脹脛　チアキ
喪帰りの睡蓮の花滲みけり　道を

八月分

金魚たち水を換へれば喋り出し　千重子
デザインで求めし洋酒夜の秋　ひろこ
機上のワインハイビスカスに会ひに行く　富子
若妻の頃の写真を夜の秋　チアキ
椰子の葉のそよぐ砂浜仏桑花　玲子
外科壕に少女の声と仏桑花　道を

けやきの会（東京）

蓮の花の開花見たさに行く早朝　由美
百合一輪机上にオンライン授業かな　祥絵
思ひ遣ることも糧なり沙羅の花　康世

八月分

一雨に森の量感夏深し　祥絵
曇天を押し上ぐるかに蓮の花　由美
晩夏の富士の大沢崩れ浴びて佇つ　康世

りそな俳句会（浦和）

四万十の瀞の青さや夏料理　建治郎
氷片の匂ひ仄かな夏料理　寛治
骨切りの音に唾のむ夏料理　暦文
夏山を駆け巡りゐる谺かな　雅夫
ガラス器に朱のもの一つ夏料理　道を
夏山に魅せられ一途山男　克之
富士湧水を引き込む宿の夏料理　マスミ

水明大阪俳句会（守口）

疫の街ふぐ提灯のさみだるる　ゆら女
捩ぢ花の捩れにもある個性かな　洋子
万緑の小径にぽつりポストかな　智恵子
香木を説く店先に奈良団扇　人美
風鈴や雨呼ぶ風に鳴り乱れ　和子
貝殻を耳朶に黙祷沖縄忌　敦子

八月分

モナリザの微笑枝豆はじけとぶ　ゆら女
夜明け待たず蝉鳴くひたすら生を鳴く　洋子
向日葵の見渡す街やコロナ禍に　智恵子
馴初めを箇条書きして盆用意　人美
水無月の供華に剪りゐて白ばかり　和子
間おき粛粛コロナの原爆忌　敦子

新樹の会（浦和）

滝行の女唱ふる般若経　道を
掌の上に夏桃切れば角生まる　月を
向日葵の角曲がりまた角曲がる　平通
滝音に寄り道をする余裕あり　京子
角界を目指せわんぱく草相撲　修
サングラス取りてあやせど泣きやまず　清吉
草取の母の背中の丸さかな　紅花
サングラスとマスク外して理髪店　でん治
落日を曳きて秋野の牛の角　鶴城

八月分

人込みを離れてひらく秋日傘　京子
警報器鳴り秋の蛍も通るらし　韶子
内張に黄のモノグラム秋日傘　月を
秋日傘余裕の目元覗かせて　修
天の川友と誓ひし隠し事　清吉
ペガサスに乗りて渡らむ天の川　平通
天の川海より発ちて山に入る　道を
桃を剥く親指の反り父譲り　鶴城
終電車乗換駅の天の川　でん治

水明熊谷句会（熊谷）

大振りののどくろ鮓に加賀銘酒　秀子
姉といふ母居て作る一夜鮓　燈女
馴鮨に唇高く盃重ぬ　治江
記念日に寿司を食する大家族　裕子
飯鮓食み夫に郷愁甦る　栄子
立食宴鮓桶前に鉄火肌　徹平
築地にて話題の鮨を待つ夫婦　正行
知床に燃ゆる漁火夏の宿　和子
見得を切る特上鮨の初デート　茂子

八月分

朝顔の百態競ふ格子窓　燈女
稲刈るや四方の山の艶めきぬ　治江
朝顔や色違ふ花背を競ふ　裕子
祖母がゐて母がゐた日々衣被　栄子
朝顔や御七夜明けの垣根越し　徹平
朝顔や童の頃の観察誌　正行
朝風に朝顔深き藍極む　和子
不意の客先づはひと品衣被　秀子

水菓子や老舗に並ぶ秋の艶　茂子

ミモザの会（横浜）

途切れなき蟻の行進砂糖壺　亜弥子
炎天下就職戦線異状あり　栄子
ベルボーイの厚き胸板パリー祭　慶子
故郷で聞く郭公の声高らかに　知子
突き抜ける硝子の青空パリー祭　史代
白南風や夫の進化のダンディズム　萬蝶
進物のマスクメロンは鎮座せり　由美子
遠郭公逢ひたき人に逢へぬいま　玲子
マカロンなないろ巴里祭の銀座裏　千春

八月分

天に向け吼ゆるが如し赫カンナ　栄子
秋蝉や項にまとふ長き髪　亜弥子
カンナ咲く父の生家の外厠　慶子
閼伽桶の水ゆらゆらと秋の蝉　玲子
カンナ燃ゆ男子校の応援団　知子
冥界へ昏く明るく踊唄　萬蝶
錆色の鉄路つづけりカンナの緋　史代
メリーゴーラウンド誰もゐなくてカンナ咲く　由美子
喪の家を弔問のごと秋の蝉　千春

神戸大池句会（神戸）

草笛の鳴りて少年指ならす　玲子
老鶯の終の鳴き音を惜しみなく　礼子
木立出て何処まで登る雲の峰　千津子
農道を真赤なポルシェ青田風　早苗

八月分

踊り唄流る路地裏夕せまる　玲子
手花火に逸る心や遠音きく　千津子
ほどほどの絆ともなり盆踊り　礼子
ひとときはキッズダンスも盆踊り　早苗

雛の会（浦和）

浴衣着て三十路艶めくおくれ髪　燈女
見つめたる金魚ゆつくり裏返る　喜恵
もう既に金魚と言へぬ大きさよ　佐江
水草と戯る金魚吾が月日　チアキ
藍浴衣古代を語る元教師　むら子
家中で揃ひの浴衣郡上の宵　輝翠
ちぎり絵のやうに浮きくる田の金魚　かつ子

俳句の手ほどき（岩槻）

御車代挟む夏帯襟白粉　順子
村芝居練白粉がだまとなる　延昭
葛餅や天神様の亀の首　倭子
遠き帆の白あざやかに夏の朝　水尾
葛切や古都に風呼ぶ硝子鉢　佐江
天元に白石を置き夕端居　徹平
葛練や今散瞳の吾の世界　ます美
葛切の御代り頼む勇み肌　翔太
純白は花嫁のもの薔薇大輪　美佐尾
たつぷりの蜜に艶増す葛の花　義子
葛切やＢＧＭは古関裕而　慶子
上州の三角野郎葛餅食ふ　忠男
炎昼や冷たく光る白磁展　幸代
色白の娘の日傘ピンク色　美子
宙を見て老の独白夕端居　かつ子

桜林句会（大宮）

地麦酒のあはき琥珀の色を酌む　知子
地ビールや午後一番のティーショット　一恵
缶ビール窓辺に置きて発車待つ　光子
ピアフの唄流るる街の巴里祭　光代
船上のビアガーデンや傘寿なる　美佐尾

あゆみの会（浦和）

ラムネ突く老斑の手憚らず　朋子
居酒屋で下戸の乾杯ソーダ水　和
再会は駅前喫茶ソーダ水　圭子
ソーダ水探し求めて遠回り　山遊
籐椅子に我が物顔の仔犬達　重子
遠雷や子犬は既に腕の中　藻好

水明小川句会（小川）

水満々溺れさうなるさ苗かな　きよ子
初茄子に刺あることを忘れさせ　千代子
会釈のみ男世帯に枇杷熟るる　むら子
考へに入れる一品冷奴　み　や
禿頭と白髪で一献初鰹　武
沙羅の花思はず拾ふ二輪かな　和　子
荒梅雨で退治できぬかコロナ菌　綾　子
紫陽花の小径袂を濡らしつつ　栄　子

八月分

湯上りの肌にふれゆく風晩夏　千代子
渋滞の途切れぬ国道晩夏光　むら子
亡き友を偲びて暮るる晩夏かな　武
いつときの晴れ間欲しきか油蝉　和　子
晩夏光コロナ嘆きて恙なし　み　や
野牡丹や小雨に遊び散りにけり　きよ子
風に佇つ馬肥え毛並つややかに　綾　子
旬野菜ごろり晩夏のスープカレー　栄　子

水明鬼石句会（鬼石）

自転車の籠に溢れて夏野菜　和　子
紫蘇きざみ香は厨をつつみけり　聡　子
包丁を研ぐ砥石のぬめり半夏生　紀　子
雨の中やつと色づきミニトマト　ナヲ子
街角の蔓にゆらゆら凌霄花　洋　子

八月分

渋色の迎へ提灯盆支度　和　子
カーテンにわづかなゆれや秋立つ日　聡　子
茄子漬けてあしたのいろを想ひけり　紀　子
早朝のモロコシ取りや昭和村　ナヲ子
盆送りお墓が密になりにけり　洋　子

かわせみ句会（浦和）

鈍色の日傘小脇に洒落男　順　子
紫外線黒き日傘の流行る今　良　枝
絵日傘の少女の笑顔片ゑくぼ　のぶ子
ながら雨に晴雨の日傘友として　保　子
美術館待つ行列の日傘かな　友　子
母親の日傘に入る男の児　治　郎
パラソルの中の饒舌きりもなや　功
野の寂を破る天道虫が飛び　紀　子
天道虫指先登り蒼空へ　せいじ
七ツ星自慢の家紋天道虫　育　子

柿の木塾（浦和）

切り方に母の裁量メロン切る　昇
遠雷や鉤針編みの一目落つ　和　葉
日雷に追ひかけられて沈下橋　清
いかづちの一足とびに伊豆相模　水　尾
食ひ初めの匙は銀製メロン食ぶ　節　代
疫に倦み右往左往や雷一打　かつ子
少年の産毛きらきらメロン食ぶ　恵　子
雷神の一喝食らふ身の怠惰　光　弥
メロン食べ瓜食む憶良思ひやる　俊　晴
雷一打人面石に罅のあと　和　子

八月分

夜も更けて戯唄も出る踊かな　かつ子
遠会釈無沙汰を詫びる踊りの輪　昇
朝茶事の蹲踞に水白木槿　光　弥
音読の声響きくる白木槿　和　葉
茶畑にあきつ集まる日暮かな　清
小さき町小さき太鼓や盆踊　俊　晴
人生の荒波かざす踊りの手　水　尾
異邦人の顔して狂ひ踊りの輪　恵　子
底紅の紅を打ちゆくゲリラ雨　和　子

水明松本句会（松本）

水盤に岳と見立てし石据ゑる　恒　子
雨欲しき向日葵の列首垂れて　陽　子
朝起きてゲームざんまい夏休み　マリス
ザワザワと滝の水音冷風扇　玲　子
まだ弾ける指に力を葉月の夜　寿　子

水明俳句会 会員 各位

水 明 俳 句 会
主宰　山本鬼之介

「水明創刊90周年記念」全国大会・祝賀会日程についてのお知らせ

水明７月号に掲載の記事の通り、７月 14 日の常任幹事会において方針を定め、ロイヤルパインズホテル浦和の責任者と話し合いの結果、「水明創刊 90 周年記念」全国大会・祝賀会の開催について下記の通り決定しましたのでお知らせいたします。

【全 国 大 会】 令和２年 11 月９日（月）
ロイヤルパインズホテル浦和４階「ロイヤルプリンセスＡ・Ｂ・Ｃ」３室を繋げ、１テーブル１人掛けにして充分に間隔を保ち安全を期す。

【祝　賀　会】 無期延期とする。
新型コロナウイルス感染状況の好転をもって、改めて開催時期を検討し決定する。

全国大会開催要領

［期　日］　令和２年 11 月９日（月）13 時～ 16 時
※受付 12 時より
［会　場］　ロイヤルパインズホテル浦和４階
「ロイヤルプリンセス」
［会　費］　6,000 円
［申し込］　本記念号巻末に添付の申込書で、（既に申込み済の方も改めて）申し込んでください。

第４回「水明塾」参加者募集

雑詠欄「水明集」投句者と未だ投句の無い誌友を対象の「水明塾」を下記のとおり実施します。参加申し込みは、コロナ禍への対応上先着30名で受付終了とします。30名をオーバーした場合はその旨お断りの連絡をし、後日参加費をお返しします。

なお研修会のスムーズな運営を期すため、兼題２句を参加申し込み時の事前投句とします。早めにお申し込みください。

【日　　時】 2020年10月27日（火）　9：00～17：00

【会　　場】 JR浦和駅東口 「浦和パルコ」10階
浦和コミュニティセンター第14集会室

【参 加 費】 2, 000円（お茶・弁当込）

【参加申込】 参加費と兼題句２句を添えて10月９日(金)までに水明発行所総務部へ郵送または直接申し込みください。

【カリキュラム】（予定）

1　主宰講和「俳句における虚と実」

2　句会と相互討議

※兼題　季語「草の花」・テーマ「音楽」で２句

注）テーマは詠込みではなく「音楽」の字を使わず、例えば曲名や楽器などで「音楽」のイメージを表現すること。季語は秋で。

参加申し込み時に200字原稿用紙（B5）に作者名と２句を列記

3　講義「季語に付く助詞、季語を導く助詞」

4　俳句における疑問質問　※予定の質問があれば投句の際に記載を。

研修部

令和３年 新珠賞作品募集

水明新人賞である新珠賞作品を下記の要領により募ります。

新人登龍門の主旨をよく解されて多数のご応募をお待ちしています。

応募資格	季音同人を除く同人・誌友
応 募 句	未発表作品：15 句
締　　切	令和３年２月末日（発行所必着）
応募方法	水明 12 月号に応募用紙添付

「現代俳句カレンダー 2021」販売のご案内

昨年から体裁が一新され好評を博しました現代俳句カレンダーの注文受付を開始します。今年も引き続き多くの会員のご注文をお待ちしています。

◆体　裁：Ｂ４判の上下二連
◆価　格：1,200 円／１冊（定価の２割引）
◆注　文：下記の通りお願いします。
葉書に、①注文者の住所・氏名・連絡先電話番号②注文冊数③受取り方法〔発行所で引取・自宅又は指定先に発送〕の３項目を明記する。
葉書の宛先は、〒 330-0064 さいたま市浦和区岸町４-10-21
水明発行所カレンダー係
◆備　考：水明俳句会より４名の俳句が載ります。
３月　星野和葉・椎野美代子　　６月　山中順子
８月　山本鬼之介（短冊揮毫）

※間違い防止のため、ご注文は葉書でお願いします。葉書以外の注文はご遠慮ください。
※ご不明の点については、「総務部　日髙　徹」TEL048-822-8370　090-2122-1223 へお問合せください。

水明俳句会　総務部長

風　声

○**俳句四季**八月号―「季語を詠む・ギヤマン」欄
飲み乾さむいざギヤマンの馬上杯　**鬼之介**

○**現代俳句**八月号―「現代俳句の風」欄
螢籠匂へり閨の夜明け前　菊池ひろこ
桜桃や絶えて久しき斜陽族　染谷　正信

○**くぢら**（中尾公彦主宰）―八月号「受贈俳誌美術館」欄
羅を粋に着こなしお部屋様　**鬼之介**

○**草笛**（太田土男代表）八月号―「受贈誌一詠」欄
出窓より藤に語らふ夜想曲　**鬼之介**

○**新月**（松田碧霞主宰）八月号―「受贈俳誌紹介」欄
兄よりも妹つよし蝌蚪の紐　**鬼之介**

○**雪嶺**（石本雪鬼主宰）七、八、九月号―「受贈誌」欄
虚無僧の現れさうな夕霞　**鬼之介**
うららかや平均台の脚線美　〃

○**太陽**（柴田南海子主宰）八月号―「一誌一耀」欄
兄よりも妹つよし蝌蚪の紐　**鬼之介**

○**菜の花**（伊藤政美主宰）八月号―「諸家近詠」欄
蝋石の落書のみち若葉風　**鬼之介**

○**鳰の子**（柴田多鶴子主宰）八、九月号―「珠玉の一句」欄
兄よりも妹つよし蝌蚪の紐　**鬼之介**

○**わおん**（野本希容資主宰）八月号―「十七音の交響楽」欄
日の本に乱いく度ぞ松落葉　**鬼之介**

○**谺**（山本一歩主宰）八月号―「受贈誌の一句」欄
百年の校舎を隠す桜かな　野田　静香

○**対岸**（今瀬剛一主宰）八月号―「結社誌を訪ねて」欄
怒り頂点卵白の泡角立ちて　栢尾さく子

○**麻**（嶋田麻紀主宰）六月号―「俳誌展望」欄
前田さつき氏による「水明」三月号の紹介
水明の歴史、歴代主宰の紹介の後、目次に従って紙面が詳細に紹介されている。（掲載句のみ紹介する）
（今月のかな女）
雛見るやひとり坐りて燭の下　**かな女**
（華の一句）
氏神のみちを春着の裾捌き　井上　玲子
（主宰八句より）
琴爪やいつのまにやら春の雪　**鬼之介**
洛外の秘仏をめぐる日の余寒　〃
つつがなき米寿の指よ春袷　〃
何時になき女医の横顔春の風邪　〃
（同人作品より）
冬ばらや金輪際のいろ絞る　椎野美代子
吐息せば烟るましろき冬のばら　〃
大斎原木漏れ日は箔笹子鳴く　大橋　廸代
暖炉爆ぜ放蕩話たけなはに　〃
（季音作家感銘句）

尺八の一音狂ふ小正月　大村　節代
蝋梅の香の溜まり場に荷物置く　栢尾さく子
若水に家長手馴れし腕捌き　小林萬二郎
初明かり生家の雨戸岩戸めく　椎野美代子
ゴスペルの途切れとぎれに春寒し　西山貴美子
おだやかな日のつづきけり小正月　茂木　和子
男にはをとこの事情雪の夜　山中　順子
三角に日当たる庭の福寿草　山中みどり
寒林や入るに掟のある如く　吉住　光弥

（雪景より）
満席の頭上に冴ゆる一の糸　由良ゆら女

（硯箱より）
海神となりし学徒や冬ざるる　小林萬二郎

（水琴窟より）
捨案山子極悪面を晒しをり　水落　守伊

（主宰作品評より）
虎落笛父の右手は戦場に　飛永　鼓
枯園やおとぎ噺の蜜と毒　青木　鶴城

網野月を氏による「現代俳句鑑賞」と青木鶴城氏による「大相撲吟行記」の紹介
初場所や起立し我も君が代を　橋本　京子

最後に、「かな女以来の伝統を守る「水明」の更なるご発展をお祈りいたします。」と結ばれている。

尚、同誌「消息」欄に、「水明」五月号の梅澤佐江氏筆「俳誌望見」の「麻」二月号紹介記事について松浦編集長による細かなご紹介と、氏の編集姿勢が記され、最後に梅澤佐江氏の「家中の光の束や合格子」「人魚のやうに座る乙女よ磯遊び」二句をご紹介され、「深謝」の言葉が添えられている。

水明発展基金御礼（敬称略）

―令和二年八月三十一日現在―

山本鬼之介　50口　山中みどり　10口
宇田　白鷺　10口　秋山　紅花　2口
匿　名　10口　鈴木　和子　5口
矢島　清　5口　日髙　道を　5口
丸山マスミ　5口
原田　秀子　5口

―合計107口―

誤植訂正

八・九合併号に誤植がありました。お詫びして訂正いたします。

一二二頁下段十三行目
誤　春の風夢工房は多忙です　正木×萬蝶
正　春の風夢工房は多忙です　野田○静香

後記

暑さ寒さも彼岸までとはよく言われたものである。あの殺人的な暑さもどこへ消えたのか涼しさ越して寒くなってしまった。又新聞一面に載っていた新型コロナウイルスの記事も八面ぐらいのところに載っている。喉元過ぎれば の譬えかコロナ禍も忘れられている。

しかし感染者数は減らない。しかし人間は生きて生活をしなくてはならない。GOTOトラベルなるものを設けて経済援助の一端を発表している。

三密を守り人数を制限してりんどう忌を修めた。敬老の日の65歳以上が30万人増えたのには驚いたが、私もその一人であることに今更ながら永生きに戸惑いを覚えた。

十一月に開催される創刊90周年の全国大会も準備に追われ無事に終る事を祈らずにはいられない。

私ごとながら体調を崩してままならぬ外出禁止に少々苛立ちを覚えながらコロナと付き合う秋も深まって行く晩年もいいか。（順子）

コロナ籠りで弥が上にもテレビを観る機会が多くなっている。そして何とコマーシャルの多い事か辟易させられる。例えば、

野菜不足…乳酸菌百億個入青汁

膝 関 節…VJ錠一日一回三粒

美容関係…クリーム一個で六つ

の効能、その他色々。

加えてお試し価格半額以下、使用した人の利き目を煽り、購買心を誘う。健康になりたい、美しくなりたいと飛び付きたくなるが、本当なのと疑いたくもなる。

人に会えない、会話もない、外出が出来ない。今まで当り前だった事が当り前でない生活が如何に大変な事かと思い知らされる。外へ出て見ても、街中マスクが歩いている。今までにない異様な光景、だんだん防毒マスクに見えて来た。

籠り生活を強いられているからと云って作句に専念出来るわけでもない。金子みすゞさんの世界に一日も早く戻れる様になりたい。（和子）

GOTO何とかと言われても、旅行も美味しい外食もままならない。そんな折、90周年記念に向けてかな女先生に関したものを探して家の中を掻き回した。何故かと言えば、紗一、明世先生が亡くなられた後短冊、色紙、掛軸など中を確かめる事もなく我が家に運び込まれたままになっていたのである。又、断捨離が苦手な私の方も色々大変である。写真や手紙は見出したり、読み出したら切りが無い。そして、捨てきれないものは別の箱に。苦笑しながら……。

編集関係の物が入った箱の底からは、八〇〇号記念号の時いただいた特別寄稿の原稿が出てきた。金子兜太、鷹羽狩行、有馬朗人、三橋敏雄、松澤昭、成瀬桜桃子、伊藤敬子、岡田日郎、松本旭、深見けん二（敬称略）の生の原稿である。

当時の川村悠太編集長の下、池上貴誉子さんを通して私の所に納まったものだ。これ又捨てられない。記念号を読み始めると、なかなか面白い。（和葉）

水明

令和二年十月号
通巻一〇八一号
令和二年十月一日発行

発行人 山本鬼之介
〒330-0073 さいたま市浦和区元町一一七一一八
電話 048-886-六〇〇三

発行所 水明俳句会
〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四一一〇一二
電話 048-822-四七四一

誌代 半年分 六、〇〇〇円
一年分 一二、〇〇〇円
同人費（誌代を含む）
一年分 二四、〇〇〇円
季音同人費（誌代を含む）
一年分 三〇、〇〇〇円
振替〇〇一七〇-〇-一九二三九三

印刷所 中央美版

「水明創刊90周年記念」全国大会
申込書　〈申込締切　10月26日（月）〉

◆**記念全国大会**　11月９日（月）　　会費 6,000円

◆**宿 泊 斡 旋**　シングル　ツイン　※どちらかに○を付けてください。
※宿泊費は、ホテルで個人清算です。

◆**申 込 方 法**　（下記1または2のどちらかに○を付けてください。）
1　申し込みされていない方（6,000円を添えて申し込んでください）
2　申し込みされている方（差額返還方法を選び○を付けてください）
①発行所で引き取る（引き取り希望日を連絡願います）
②指定の金融機関口座に振込み希望

◆**申　込　書**　送付先：〒330-0064　さいたま市浦和区岸町4-10-21
水明俳句会

令和２年　　月　　日

住所	〒		
氏名		電話	
参加費納入方法	現　金	振　込	

◎以前申し込みされていて、差額返還方法の②を選ばれた方は、振込先金融機関名・口座名・口座番号・名義人名を明記してください。→

［金融機関名］

［口　座　名］

［口 座 番 号］

［名 義 人 名］

きりとりせん

最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

職業

年齢

水明集

一月号　十月二十五日締切

都市又は府県名

氏　名（俳　号）

きりとりせん

水明通信

きりとりせん

都市又は府県名	姓並びに俳名

通信欄（近況・感想などご自由にお書き下さい）

送り先　〒三三〇-〇〇六四　さいたま市浦和区岸町四ー十ー二一　水明発行所

新誌友紹介　下記の方が入会を希望していますので、見本誌をお送りください

住所	〒　－		
氏名		電話番号	－　－

通信欄（近況・感想などご自由にお書き下さい）

季音抄

山本鬼之介

漕ぎ出さば花睡蓮の暗き水　菊池ひろこ
落日に縋る出船や佐渡晩夏　五明　昇
ががんぼや脚註にある斜体文字　境　延昭
香水のゲラン・エルメス家籠り　椎野美代子
喉元を弾くラムネの小休止　島津　初花
常に見る富士の在り処や夏燕　鈴木　康世
四つに組む闘牛の角夏嶺燃ゆ　大場　順子
盆踊互ひに老いて行き違ふ　小倉　倭子
明易し推理小説下巻へと　高島　寛治
始祖鳥の羽撃きに似て夏木立　柚木　治子
老鶯の終の啼音を惜しみなく　井関　礼子
遠き日の母の笄土用干し　藤澤　喜久
地球から溢れ出てゐる夏の海　正木　萬蝶
蜜豆や銀座路地裏黄昏るる　梅澤　佐江
告白の呂律怪しく黒ビール　福田　千春
杣道は太古の匂ひ山清水　松井由紀子
腹の中隠すことなき海月かな　井口　俊晴
天元に白石をうち夕端居　近藤　徹平

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内（句に雑誌名、句集名、刊行月を付す）

▼散歩道〈身辺トピック〉

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内（題をつけて）

▼山紫水明〈随筆〉

テーマ…自由

枚　数…二百字詰原稿用紙五枚半以内

夏季競詠抄

山本鬼之介

郭公や池塘は神の凹レンズ　大橋　廸代
捺染の老舗の暖簾閑古鳥　青木　鶴城
雲の峰進水式の銀の斧　矢作　水尾
進み出て籤改めの麻衣　由良ゆら女
郭公や音痴が紛れ込んでゐる　網野　月を
郭公や眠らぬ眠狂四郎　正木　萬蝶
郭公や渡り切つたるかづら橋　森川　義子
色里に隣る里坊閑古鳥　山中　順子
郭公鳴く風に誘はれだるま船　大村　節代
黒南風やデモ行進の蛇行せり　野田　静香
堂々と進の一文字白扇子　柚木　治子
見沼田に郭公の声母のこゑ　日髙　道を
膝頭抱き思案の羅漢郭公啼く　丸山マスミ
郭公の声にガムラン合はせたり　松井由紀子
進物の鯵のくさやの置きどころ　石山かつ子
「あれ」「それ」で進む対話や冷素麺　境　延昭
郭公の声を薬味に蕎麦処　五明　昇
いきなりのくちづけ郭公谺して　山中みどり

水明例会案内

句会名	日時	会場	指導者	幹事
第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミセン（パルコ10F）	山本鬼之介	茂木和子 境延昭
第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中みどり 太田絹映
第三例会	第1月曜・午後1時	新宿区大久保ルノアール	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミセン（パルコ10F）	椎野美代子	境延昭 石井喜恵
第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化センター	大橋廸代	森本早苗
婦人句会	第3月曜・午後1時	水明発行所	山中順子	西山貴美子
若松句会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	菊池ひろこ 石田慶子

水明　令和二年十月一日発行　毎月一日発行
（第九十三巻　第十号）　定価　一〇〇〇円